
願いが叶うオマジナイ

アクア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

願いが叶うオマジナイ

【Nコード】

N9231C

【作者名】

アクア

【あらすじ】

人はそれぞれ大なり小なり願望がある。そんな願いが叶うなら…。そんなオマジナイがあれば…。人間の表と裏を書いたストーリーです。友情と恋愛…。そして、願い。誤字、脱字、読みにくい部分もあると思います。それでも読んで頂ければ光栄です。宜しく願います。

第一章 1 マジナイハート

「ねえねえ、知ってる？マジナイハート！」

「え？何それえ！知らない」

マジナイハートとは、男は水色の紙に、女はピンクの紙に願いや妄想を書いて願う、いわゆる魔法のオマジナイ。紙に書いたお願いの紙を二つのハサミでハート型に切り、大切に保管する。

注：ハート型に切った紙を…

汚すと汚れた願いに…

破ると願いが叶わなく…

折り曲げるとひねくれた願いに…

綺麗に残しておかないと思い通りの願いは叶わないのだ。

このオマジナイを広めたのは俺、しいな椎名 そつた蒼汰。

高校二年のバカな男。勉強もしないでカラオケやビリヤード…遊んでばかりの人生をおくっていた。

少し変わっている性格で、妄想癖がある。一人になると自然と妄想して楽しんでいた。

ある時、変な夢を見た。

それは…

夢の中で皆で男は水色の紙を、女はピンクの紙をハート型に切っていたんだ。そして、願を書いて大事な物、思い出の場所にしまい保管していた。

俺も皆のマネをし、アルバムに挟んで大事に保管。

途中、変な人が出て来て…

『汚したり、破ったり、折り曲げたりしないで下さい。思い通りの願いが叶わなくなります。』

願い？

俺は、フツて鼻で笑いながら教室を出ていった。

そこで夢は覚めた。

俺は夢の中で“これは覚えておくぞ”って。いつもは夢なんてすぐに忘れてしまう…のだが、この夢だけは…

この夢…マジナイをネタにして、女友達を増やすか！あわよくば…

そんなくだらない欲望からこのオマジナイは始まった。

いつもの様に学校に行き、授業を受けていた。

誰かに夢の事を伝えたくて…

そして昼休み

まずは仲間に話してみる事に…

『なあなあ知ってる？マジナイハート！』

『はい？何だそれ！』

『知らねえのかよ！これ、かなり流行ってるんだぜ！』

『……知らねえ。』

こいつガキの頃からの仲間で中塚^{なかつか}隆弘^{たかひろ}。いつもクールに決めた、グループの一人。手が早く、喧嘩も女も瞬殺だ！

隆弘に言えば大体女に話が回る。マジナイのやり方と注意点を伝え、『必ずやれ！』と念を押した。

そこに徐々に群がるクラスの女達。

『嘘お！ありえない？』

『どうせ蒼汰のネタじゃあん？』

まるで信用ないのか…

その中で興味を持ったのが、やっぱり昔からの連れ…

木村 きむら 綾と上村 あや かみむら 春菜 はるな。占いやらオマジナイがお菓子より好き！

『蒼汰？ホントなん？でも…ね！』

『うつそお！やる、やるやるやる！』

目の輝きが違つ綾と春菜。ここのクラスのギャル代表の二人が興味持つ…周りのギャルも興味を持つ。計算通りに事が進んだ。

それぞれどんな願いを書いたのかなんて事は知らない。

ただ、俺のガセネタに踊らされてるお前等を見てるのは楽しいな！

その噂は思つた以上に広まり、三日もするとクラス、学年を超えて学校中へと広がった。

『マジナイハートイケてない!』

『ホントに叶うのかなあ…。』

声は様々だが、噂はドンドンエスカレートしていった。

俺は、さらにルールを増やし…

ハートは大きい方が良い…

するとクラスのバカギャルがとんでもないデカイハートを作り始めた。

『これなら凄くない?』

『ていうかダメじゃない?』

俺はそのやり取りを見て思わず吹き出す。一生懸命願いを書く。『彼氏が欲しい!』

あはははっ！

ギャル集団がそのハートを一斉に持ち上げた。

ピリッ！グシャ…

だから言わんこっちゃない…。

『あゝあ！もう終わりじゃん。』

噂に聞くと、先生達もやってるって…

最近、毎日の様に夢を見る…オマジナイの夢。

また、変な人だ…

『皆さん！一度しか言いません。これは一度きりの願いです。くれぐれも慎重に！』

一度きりのチャンスか…

『あのお…』

また途中で目が覚めてしまった。夢の続きを見ようと、二度寝をしても違う夢…

その日は遅刻してしまった。

夢の事を考えながら歩いていた…

『マジナイ ハートでしょ？知ってるしい！』

ヨソの学校の制服…。マジかよ！

うちの学校だけじゃなく、他校にまで広がっていたんだ！

そんな時…

ホ・ホケキヨ
♪

相変わらず間抜けな着信音が鳴り響いた。その相手は隆弘。

『んあ！どしたん？』

『どしたじゃねえ！出たんだよ！』

『はあ？意味意味！主語がねえ！』

『マジナイだよ！叶ったってよ！』

『はいー！』

マジナイが叶う？んな訳ねえ…。まあ、たまたまだよな…。

少し気になり急いで学校へ向かう事にした。

教室に入るとクラス全体が騒がしかった。俺も急いでその輪に飛び込んだ！

『おい！おはよ。隆弘？』

『蒼汰、普通に遅刻すんなよ！』

『しょうないじゃん、二度寝しちゃったし！んで誰なん？』

『綾だよお！めっちゃすげくない？』

綾は、ピアスをチラつかせていた。半年位前からずっと探している、ほぼ諦め始めていた。そんな時、ハートに心を込めて書いた…
みたいだ。

『一週間もしないうちに見つかったよお！めっちゃ良かったあ！』

…あ、なんか可愛い。

ピアスか…まぐれだな。たまたま見つかったただけだよな…。

『また書いちゃお！ねえねえ、春菜？どうしよつかあ！』

『あゝや！私まだ書いてないんだけど！でも、マジ効くんだね…このオマジナイ！』

そう言えば夢で一度きりのチャンスって言ってたな…

『なあ綾！このマジナイ一度きりだぞ！』

『はあ？何それえ…ダメじゃない？』

『そんなん言われたってしょうないじゃん…』

『だってピアス……マジありえないじゃん！蒼汰バカ！』

な、なんで俺なんだよ…。

文句言いながらも願いを書く綾。ギャル集団は願いが叶うオマジナイを本気で信じ始めた。

ガセネタを流行らせ始めて一カ月近かった…

どこに行ってもマジナイハート！思った以上の反響だった。でもその反面、ガセネタってバレたら…考えただけでゾツとする。

『なあなあ！蒼汰？』

『ん？』

『何処行く？』

噂に耳を奪われていたけど、実は隆弘と俺のダブルデートの最中！

隆弘は隣のクラスの山中やまなか静しずか。隆弘の彼女で俺とも仲が良い。

そしてもう一人は渡辺わたなべ小真希こまき。つき合ってる訳じゃないけど、俺に好意を持っている…らしい。

『隆弘？何処行く？』

『ホテル！』

『……行け！勝手に死ね！』

小真希は俺の腕をグイグイ引っ張りアイスを指差した。

『美味しそうじゃない？』

『……そんな食ったらデブるぞ！』

と言って急いで逃げた。

『コラッ、蒼汰！』

小真希も怒ったフリをして追い掛けてくる。結局捕まって買わせるのがオチなんだよな…

俺は、何処か行ったりとか、何かしたりってより楽しく時を過ごせば良かった。仲間とただ同じ空間に入れば、それだけで満足していた。

街を四人でフラつきゲーセンでプリ撮って…

そんな時…

『へ……』

俺の肩に誰かの手が…遙！

『なあに逃げてんの！』

振り向けばヤツがいた……

『蒼汰、ちょっとプリ撮ってくるな！シ・行くぞ！』

『え…隆弘？』

静は隆弘に引っ張られる様にまたゲーセンに吸い込まれていった…

『蒼汰？誰この人…。』

小真希は遙をジッと見詰める。

俺は小真希の腕を引っ張り…

『とりあえずどつか…隆弘ん所に行ってる！』耳元で呟いた。

『嫌だあ！絶対行かない！』

あゝ困ったな…

『蒼汰！誰なん？』

小真希は少し不機嫌そうに…

嫌な汗が出て来た…

『あなたこそ誰なの？』

遙は涼しげな声のトーンで小真希に話掛けた。

いかにもムツとした表情をする小真希。そして…睨みながら…

『蒼汰の彼女だけど何か？問題でも？』

な、何言ってるんだ…俺達…え？付き合ってたの！

遙は微笑み、小真希の威圧感を跳ね返す様に…

『ふうん。子供つくるなよ！』

小真希は思いもよらぬ言葉に驚き、目がいつもより1・5倍に開いていた。

『なあ何だよ姉貴！楽しんでんのに、邪魔すんなよ！』

姉貴と言っ言葉に反応する小真希……。徐々に俺の後ろに……。一時
停止状態に……

椎名^{しいな} 遥^{はるか} 24歳 椎名家の長女。父親が子供の頃に他界。母親が
働きにでてる間、ずっと俺の事を面倒みてくれた姉。空手の有段者
であり、今本気で喧嘩しても多分……かなわないだろう。

『可愛い彼女ね。今度ゆっくり遊びに来なさい！……ね？』

小真希は俺の背中に隠れながら小声で『はい！』って……

『それで何？』

俺も仲間という時に邪魔されて少しイラついていた。

『ん？蒼汰なら知ってるかなって。マジナイハート！』

え？俺達の年代より更に上！大人まで広がったのかよ！

マジナイハートが大人にまで広がっていた。俺のガセネタが…

『知ってるよ！マジナイハートでしょ？』

少し周りをキョロキョロしながら照れくさそうに話し始める遥。

『会社の同僚から聞いたんだけど、オマジナイのやり方…分からない。だから教えて？』

何か深刻な問題かと思えば…。女ってホントこういうの好きなんだな…。

それに、何か後ろでもぞもぞしてるんだよな…。俺のシャツをギョツと握り、いかにもこれから何かしますって…見なくても分かるな。そんな事を思ってるやさきにピョンと俺の横に…まだシャツは握ったままだ。

『お姉さん？私、小真希って言います。知ってますよ！オマジナイ。まだあ書いてないんですけど…教えましょうか？』

『ホント？ありがとお。』

うお！小真希…いかにもご機嫌とりって感じじゃないか…やけにニコニコしゃがって…。

まあいいか…

『おう！蒼汰？もう済んだ？』

ゲーセンからヒョコつと顔を出す隆弘と静。まるで何事もなかったかの様に現れた。

『うん…』

俺は目で合図。遥と小真希のやり取りを見て…疲れるよ！

何だかんだで姉貴と小真希は意気投合。

『ああ！お姉さん綺麗ですね！私もマジナイハート好きなんですよお！』

そこに静も加わり…女同士楽しく盛り上がっていた。

なにしてんだか…

俺達も店の横に座りポケットと女を見ていた…

『隆弘？』

『ん？』

『このマジナイ信じる？最近かなりきてるけど…』

『まあ良いんじゃない？当たれば信じるし…当たらなきゃやっぱな
って…まだ書いてねえけど…』

だよな…って言うかガセだぞ！そんな事を思いながら徐々に夕日は沈んでいった…

『おはよー!』

深刻そうな顔をしながら綾が近づいて来た。何やら雲行きが怪しい…

『蒼汰!何か願い叶わないよお…。』

『はあ?』

『「は」じゃないし!』

『だって願い叶ったじゃんさ!』

『そうだけどお…綾の気持ち分かってないっしょ!蒼汰バカ!』

だから…何で俺バカなんだよ。

俺は言われるがままに…。綾にしろ春菜にしろ疲れるぜ…。

そっとその場から離れ席に着こうとした…

『ハアハア…蒼汰さん！隆弘さん！ちょっと…』

ドアの所で息切らして俺達を手招きしてるヤツがいる…

海藤 かいどう やす 泰16歳 中学からの後輩。サ・フィンやフットサルで鍛えてるスポ・ツマン。

『ヤス！どうしたん？隆弘、ちょっと！』

『なんだお！』

話を聞くとマジナイハートの話だった。ヤスは、願いに“ビッグウェーブに乗るチャンスをくれ”って。でも、端っこの方少し折れてしまったみたいだ。

『ヤス？マジナイ信じてんの？大体、そんなデカい波…来るわけねえじゃんさあ！なあ隆弘！』

『え…でも台風近いらしいぜ！』

『そうなんすよ！それで願いマジ叶うかもって…そしたら折れてるんすよお…あゝ！』

『マジ！でも何で俺に言うんだ？』

『蒼汰、何かヤケに詳しいだろ？俺、皆に言っちゃったもんよ！分らない事あったら蒼汰に聞けって……まずかった？』

隆弘……バカ！

『そおっすよ！大丈夫かなって…俺結構オマジナイとか信じるタイプなんすよ！蒼汰さん。』

こいつらマジうぜえ…

『大丈夫じゃん？知らないけど…。って言うか俺、神様が！』

俺は急いで廊下に出て、思い切り言ってやった。

『皆、聞け！俺は神様かぁ！知らねえもんは知らねえ！』

はぁ… スッキリした… はぁ！

気付いたら教室から出て来る者、窓から顔出す者…皆見ていた。

『蒼汰！どしたん？』

小真希なんか隣のクラスから走って出て来た。

『ん？まあ気にすんな！』

頭を軽く叩いて教室に戻って行った。

教室に入って少し気になる事が…

それは…

綾達が小真希の事を見ていた。

この時は何見てんだって位だったが…

『ねえねえ、蒼汰君？』

『なあに！マジナイなら知らないよ！』

ヤケに多い……。昼休みになると決まって聞きに来る……。知らないヤツやらなんやらで……。頭が痛い！俺を癒やしてくれるヤツはいないのか……

『蒼汰、どしたん？悩みなら……小真希がのつたげる！』

『……ありがとチャン！でも気にすんなあ。』

俺は、いつも昼休みになると決まって屋上に行く。小真希も、いつも一緒にいてくれる。凄く優しい子なんだ。気付いたらいて当たり前
の存在になっていた。

まだ告白はしていないけど……

『小真希は…何もなくていいよ。ただ、側にいてくれればいいよ。時間来たら教えてね。…おやすみ』

『蒼汰好きい。』

そういえば、小真希ってマジナイやったのかな…。まあ、後で聞くか。今は寝よ…

あれ…

また変な人だ…夢か！

『願いが大きければ大きい程、リスクも高くなります。注意して下さい。取り返しの付かない事になります！』

えーヤバいじゃん…ヤス…

今日こそは聞くぞ！

蒼汰……

あれ？小真希の声？

『蒼汰！時間だよ！起きなさい！』

『……あれ？おはよ……』

また聞けなかった…

いつも大事な所で夢から覚めてしまう。まあしょうがない…

小真希と教室まで行き、B組の前で別れた。そして俺は自分のクラスへ…

『蒼汰！何か怪しい雰囲気だぞ！』

『何が？』

『台風！』

『……まだ天気は良いけどなあ！』

隆弘は、携帯の天気予報を見せた！

『来週には直撃だってよ！このサイズはやばいぞ！ヤス……あいつ今週末行きそうだな！』

『だってマジナイ折れたって……やべえぞ！』

俺は急いで知らせに行こうとした！

『おい！どういう事なんだよ！』

周りのざわめきが隆弘の声で消えた。

『リスクしよってんだ……！』

先生！

『はいはい、何処に行く椎名！これから授業だろ！』

クソッ！

明後日には行ってしまおう！明日までに言わなきゃ…

9（前書き）

すみません……。小真希をコマキに改名しました。よろしくお願いします。

早く授業終われ！

早く…早く…

キ・ンコ・ン

カ・ンコ・ン♪

『よっしゃ！』

先生…お構いなし！俺は急いで立ち上がり教室のドアを開けた…

『椎名？』

なんだよ！先コ…うぜえな…

『…はい！』

『何を急いでる！挨拶は？それに、ちゃんと勉強してるか？いつも赤点ギリギリで！ちよつと職員室に來なさい！』

はあああ…

隆弘に……いない！俺は教室の隅々まで見渡した……ん？綾と春菜のギャル集団がなんか集まっていた。何か企んでいる？……気のせいかな。

隆弘…何でこんな時に…

『早くしなさい！』

明日だな…

結局、夕方まで説教された…。

ヤスには言えなかったし、説教部屋には入れられるしで散々だな…

俺は教室に戻り荷物をまとめた。

隆弘…帰ってる。コマキ…何処だあ…。あれ？綾と春菜の荷物…

あれ？まだ結構残ってるんじゃない！

俺の事待ってた？……んな事ないよな。

まあ一人寂しく帰りますか。

教室を出ようとした時……ふと携帯の点滅に気付いた。

隆弘からメールだ。着信も入ってる！何だよ先に帰りやがって……

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

蒼汰！早く校舎裏に来い！今すぐだ！

隆弘

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

はあ？どうしたんだ……何があつた？隆弘……今、行く！

走って向かった！息を切らせながらひたすら走った。

隆弘…何があった！

不安と緊張が混じり合った状態のまま校舎裏に着いた。

ハアハア…あれ？隆弘いた！コマキ…静…綾集団？

はあ？

状況が把握出来ない……でもコマキが泣いてる事だけはすぐに分かった！

『コマキ!』

俺は急いでコマキの元へ!コマキも目をこすりながら笑顔……笑顔?
顔?

『あ!蒼汰!待ちくたびれたよお』

『はあ?何かあったんじゃ……ないの?なあ、隆弘!』

『んあ?何かあったってなにがだよ!』

もしかして……早とちり?だって……コマキ泣いてたんじゃ……

『あれ?コマキ今、泣いてなかった?』

『泣いてないよ?コンタクトで目え痛かったただけだよ?』

何かムカつくな……

『んじゃあのメールは何だよ！』

『ん？ジョーク！メール入れればダッシュで来るかなあって…。』

はああ…

『んじゃ綾は何でここにいるの？』

『ええ？だってえココ綾と春菜の集合場所だもんねえ！』

『そだねえ！パラパラの練習とかあやつちゃってえ！皆でおもしろいよね。』

コイツらマジ殺してえ…

『だってよお、蒼汰バカだから先コ・に捕まるしよ、待ってる時間つまんねえじゃんさ？綾とかと話してた訳！一緒にいたコマキと静も意気投合！なにか？』

なんか涙出てきたな…

『もういいや！俺、帰る…。じゃあね！』

『おい！誰の事を待ってたと思ってるんだ！』

結局、皆で帰る事に…

あれ？さっきまで晴れてた気がしたんだけど…。風…出てきたな。台風は近い…かも。

ヤスは明日の朝に言えばいいか…。今はこのバカ達と楽しい時を過ぎそう。

夢で見るマジナイ…。

同じ様な夢…

不思議なあ的人物…

嫌でも記憶に残るこの夢。いつまで続くんだろう…

俺は少し早起きし、学校へ向かった。ヤスとゆっくり話す為に。

街を歩いていると他校の制服を着た女が嫌な噂話をしていた。

『あのオマジナイあるじゃん？何かあやバいらしいよ？』

『あゝ知ってるしい！めっちゃ流行ってるけど、後でやバい事あるらしいじゃん？』

『そうなんよ！あたしの友達も、入院したんよ！そのオマジナイのせいかわかんないけど！マジありえくない？』

マジナイ関係ないっしょ…。だって…ガセだぜ？

ちよつと急ぐか…。早くヤスに言わなきゃこのモヤついた気持ち…
…落ち着かないな。

1 - D

俺は教室のドアの前に立ち、中の様子をつかがう。

まだ来ていない…かな？

教室にはまだ生徒がまばらにいるくらいで、ヤスのいる様子はなかった。時間もあるし少し廊下で待つことにした。

『おはよ』

『お前早くねえ？』

ふっ…皆、若いすなあ。

徐々に人数が増え、だんだんいにくくなってきた…

そんな時…

『あのお椎名先輩ですか？』

俺は“ん？”って振り向き周りを見回した…あれ？

『あのお…』

あ…ちつちえ…。セミロングの外人みたいなアッシュブラウン。
142、3の可愛い女の子がそこにいた。

俺は一瞬目が点になった。そして、何なんだこの子は…と。

『ん…ああ椎名先輩ですが何か？』

『やっばしい？当たったあ！』

……はい？

ちっちな女の子は友達とキャッキャしながら喜んでいる…。

俺で遊ぶなよ…

『んであ…。』

『話聞くよりイケてない?』

『いい!いいねえ!』

はあ…俺の事?ていうか話聞いてなくね?悪い気はしないけど…
こいつらは…誰?

『あのお…お楽しみ中申し訳ないのですがあ、アナタ達は何者?』

『あ、ごめんなさい!アタシなおでし!』

相馬 なお (そうま なお) 16歳 アッシュブラウンカラ
の頭がお気に入りなちっちゃなギャル。

『私は沙耶だお!イエイ!』

仲井 なかい 沙耶 さや 16歳 アイロンでくるくるハネたダークブラウンの
ヘア - と目がまるでパンダ。

『んで俺に何よう?』

『特には…ね!』

『そだね!』

な…。最近の若いもんときたら…親の顔が見てみたい!でも、何で俺の事知ってるんだ?それに、何でここにずっといる?

『ちよつと聞くけど、何で俺の事知ってるんだ?』

『ヤスから聞いたあ!』

なおはバッグから携帯を取り出し、写メを見せてきた。写メには俺、隆弘、ヤスの写メが…

『お前等…スト・カ・か?つてか、ヤスの友達なん?』

『ちやうよ!追っ掛けだあ!』

『違うでしょ!オタクだお!』

『ちやうちやう、オタフクだあ!』

こいつらのノリには付いてけない…。見た目は可愛いんだけど、
疲れるかな？でも、ヤスの事知ってるかも…

『違うよお！オマジナイだお！』

『そうそれがいい！』

……まだ言ってるし。

『あゝ！それは後でやれ！』

『はい』

『だゝい』

だゝいって何だよ！

『そう言えば時間ねえんだよ！ヤスいつ来る？』

『ヤス？』

なおと沙耶は顔を見合わせた。そして、沙耶は“今思い出した！”
ってな顔をし…

『今日休むって言ってたお?』

キ・ンコ・ン

カ・ンコ・ン♪

はっ!チャイム…時間を無駄にしまった…

『あゝ先生来るう!』

『早く入るおお!』

こいつらホント自分流なんだな…

『ヤス、来たら顔出せって伝えといて?頼んだぞ!ミクロキッズ!』

『ミクロ?』

『可愛いじゃん!来たら言っとくう!』

ヤス…休みか…。ちよつと困ったな。隆弘に相談してみるか…。

それにしても…特殊系だったな…。おもしろえけど。

自分の教室に戻ったのはいいんだけど、隆弘のヤツ休みやがった…

こんななら学校休みになりやいいのにさ…

『おはよ！』

『はよお！休んだかと思っただじゃん！』

こんな日でもちゃんと学校に来るんだな…。

綾と春菜は化粧をしていた。時間がなかったらしく学校に来て、二人楽しみながら自分の顔を改造！

朝のニュースでは、明後日には関東に直撃するだろう。注意してくれだ…。たしかに天気予報を見ると一目瞭然。南から大型台風が北上。まさに映画並みの大接近だな…

ヤスのヤツ、今日から準備か？人の気も知らないで…どうなっても知らないぞ…。

外は強風。窓がガタガタ…今にも割れそうな勢いだな…。

昼休みになり、コマキと屋上の階段ホールで飯にした。

『はああ…すげえ風ですなあ。』

『……そつですなあ。』

二人ポオ…と口を開けながら外を眺めていた。

『俺の後輩のヤスつてのが、明日波乗りやるとか言ってたよ。』

『ええ？ヤバくない？良く分かんないけどお…。』

コマキが作った弁当を食べながら外を見る。

『やべえよな…。』

コマキも箸を口にくわえたまま頷き、外を眺めていた。

『俺…やっぱり帰るわ!』

『うん……え!蒼汰…帰っちゃうのお?やだやだやだ…』

『嫌だ言われてもなあ…。静と遊べ!』

『シ…ちゃん休んだもん……はあ…寂しいなあ…』

『イジケ虫!』

『だってえ…え〜ん。』

泣きマネをするコマキ。そんなコマキを可愛いと思ってしまつ俺…

『あ!携帯!TELすればいいじゃん?』

『お!』

何で気付かなかったんだろう…。電話すれば全てが完璧におさまるじゃん!

プップップップ…電波の届かな…ピッ！

『出ねえし…。』

『嫌だ！帰らないで！』

困ったな…。ヤス心配だし、ワガママ姫はダ・ダ・言うしで…疲れるぜ…

隆弘に電話してみるか…

……テュルルル

早く出るよなあ…

『ああ？どうした？』

『で…た！どうしたじゃねえよ！今何処いんの？』

『今？ヤスん所。』

マジ！奇跡じゃん！俺のおかげじゃん！

『マジ！ちょっとヤスに変わって？』

『おー！』

『はい！どうしました？』

『どうしましたじゃねえよ！親の心子知らずってのはお前の事だ！』

『すんません…。』

結局、俺の努力は報われず明日の朝、海に向かう頑固なヤス。何かあったらヤバいから時間と場所を聞き、現地で待ち合わせする事になった。

隆弘も静もない。珍しく二人で帰る事に…

いつもと少し違うシチュエーション。心なしかお互い意識してる様な気がした…

そんな時…

『あの〜先輩…。』

俺は振り向いた…。そこにいたのは坊主頭のチャラチャラとシルバーを付けた男が一人立っていた。

何だこのガラの悪い坊主頭は…。女もいるし、もう年なんだから…もめ事はヤダよ！

『蒼汰？ゲーセン行こ？』

『……うん。』

気を効かせてなのか、邪魔されたくないだけなのか、コマキは俺の腕をグイグイと引っ張り店に入ろうとする。

こんなヤツと関わるよりかは…良いかもな。俺達は店に入ろうとした。

『椎名先輩…ですよね？俺、有弥って言います。ちょっと話が…。』

麻生 有弥^{あそう ゆつや} 16歳 外見は危険な香りのするタイプ。坊主にピアス。シルバーアクセを全身に散らばしてる男。

話？絡むんなら他にしろ！俺は忙しいんだよ！

『ゆ〜っ〜やあ！』

……ん？誰か遠くから大声だしながら走ってくる……俺は目を細め……げっ！特殊系女だ！

『有弥早いしい！ねえ？椎名先輩だったでしょ？』

『ハアアア…疲れたおお。椎名先輩こんちゃ！』

なおに沙耶…だつたつけ？

つてか…このパターンは…コマキが…俺は恐る恐る横目で……

『ああ！なおちいじゃあん！』

『こんちゃ！コマキ先輩！』

『はあ？何だこれ…。』

コマキとなおは同じ中学出身で、昔から仲が良かった。

『んじゃミクロキッズ…コマキをよろしくなあ！コマキもミクロキッズかあ！じゃあなあ！…あれ？』

シッカリと俺のシャツを握っていたコマキ。絶対逃げられない…
そう思う一瞬だった。

『蒼汰！プリ撮るからねえ！』

目が笑ってねえ…

『…はい。』

『コマキ先輩めちゃカッコイイねえ！椎名先輩……頑張つてね！』

……どっちだっけ？……ああ！なおだ…何か人事だよな…。俺は
奴隷か！

結局プリクラを撮る事に…。店を出ると外には有弥が…。終わる
まですつと外で待っていた…。余程の訳って事？どうしたんだろ…。

『ずっと待つてたんか？』

『はい！』

『どうした？』

『椎名先輩…ヤスの事なんすけど、明日止められないっすかね？か
なりヤバいっすよ！』

そついう事か…。心配…だよな。

『有弥って言ったっけ？…悪いな…俺も出来るだけの事はしたよ！ヤスの頑固は知ってんだろ？明日、俺も行く！何かあったら必ず助けるから……。』

『マジっすか？俺も行きます！絶対行きます。』

『沙耶も行くおお！』

『なおもお！』

『コマキもお！』

『な！』

どさくさに紛れて……。まあ…マジナイだってガセだし、遊びに毛が生えた様なもんだろ！何も起こらない！

そう願っしかない…

早朝 6:00

海岸で待ち合わせ。

海に着いた頃には皆いた。昨日会った有弥、なお、沙耶、そしてヤス。

俺も隆弘と静、コマキを連れヤス達がいる浜へと向かった。

『おはよ、マジすげえな!』

『おはようございます。かなり凄いつすね!これだけのサイズ…日本じゃ見れないっすよ!』

一つ一つのウネリが高い!ここらでは良くて胸から頭。でも、今日のサイズはダブルオ・バ・ヘッド!ざっと見て12フィートはある。高いときなんか…。正直…かなりの危険度!のまれたらしゃれにならない!

『蒼汰さん…正直、震えています。やっぱり怖いつすね…。』

『ヤス、無理すんなよ？今日は辞めとこうぜ？危なすぎだよ！』

ヤスは俯き、そして…波を見た。

『ここで逃げたら男じゃないっしょ！蒼汰さん、昔言ってたじゃないっすか！“吐いたツバは飲み込めねえ！男が口に出したら実行に移せ”って！』

確かに…。昔、口癖の様に言っていた言葉。それが俺の生き方でもあった。

でも…

俺は言葉を無くした。ヤスの夢…その夢が目の前にぶら下がっているんだ…。

でも…

『ヤス、死んでからじゃ遅いんだよ！危険すぎだよ！…………辞めようぜ…な？』

『ヤス？なおも思う。スッゴく怖いの。……やめよ？』

ヤスはウェットのジッパーを閉めた。

なおの目が徐々に潤んでくる。

ヤスはこれ以上言っても聞かないだろう。有弥もなおも沙耶も分かっていた。

『そんな深刻そおな顔、止めて下さいよお！大丈夫っすから！……じゃ、いつてきます！』

ボードを担ぎ、海に歩いて行くヤス。

『ヤス〜！ちゃんと乗らなきゃマジ怒るからね！』

なおは涙を堪え……ヤスの背中を見つめていた。

ヤスも背中越しに手を振り海に入った。

『隆弘？いつでも行ける準備しておけ！有弥もだぞ！』

『ああ！』

『はい！』

皆、シャツを脱ぎ、ジャージやハパンで待機していた。

ヤスは大波の中、ドルフィン…そしてパドル。波待ちするのにも一苦労。

気付いたら俺はコマキの手を握っていた。皆、不安そうな表情をし見守る。

『来る…来るぞ！』

隆弘が興奮気味に叫び出した！

『ヤス！かなりでけえぞ！気合いだ！思いっきりこげえ！』

手に汗握る思い…。

ポイントはOK！

ヤスの後方からグングンと盛り上がってくる悪魔！ヤスも一生懸命パドルする。ドンドン高くなり…

『……何だ？何だあれ！ありえねえ、ヤバい…ヤバすぎるよ！無理だヤス！』

隆弘が走り始めた！

予想以上に出かい波…遥かに超えたサイズ！トリプルオーバ…
…死ぬ！

俺も走り始めた！

…え？

コマキの手から俺の手が離れない……コマキが離さなかったのだ

！今にも泣きそうな顔…

『コマキ…大丈夫だから。』

優しく呟き、頭を軽く撫で…走り出した！

ヤスも頑張り波とタイミングもOK！踏ん張れ！行け！

T a k e O f f ！

先に海に浸かってた隆弘と有弥。ヤスの動きをずっと目で追っていた。

波乗りには成功！横に滑る様に流れ、一旦波から離れた。そしてBottom！悪魔に向かって行くヤス！そしてCut - Back！決まった！

『アイツマジすげな！』

浜の方を振り返ると女は皆、釘付けだ…。

心配して損した…後でイジメ確定！

そして、ヤスを見た時……

『ヒヤッホー！』

雄叫びを上げるヤス……！

いきなりの強風に煽られバランスを崩してしまった！容赦なく迫る悪魔！そのままZoneにハマった！

ドッカーン！

悪魔がヤスを叩きつける様に飲み込んだ……俺達の目の前で！ボードが中を舞い主人に帰る！

ヤス！

『ヤス〜！』

浜からなおの叫び声！

『隆弘、有弥！急げ！』

急げ！早く！

クソッ！波が…勢いが…しゃれになんねえぞ！

『早く助けて！早く〜！』

なおの声は叫び声から泣き声に変わった！

波が高くてヤスを見失っ……ヤバ！

俺達をヤスに近づけまいと容赦なく襲う悪魔！隆弘…有弥…

『椎名先輩…すみません！俺ヤバいかも…』

『じゃ戻れ!』

隆弘と俺で助ける!

『ヤス〜!』

何処にいる?.....ボ-ド.....ヤス?

『隆弘!こつちだ!』

『今行く!』

波に巻かれて何処を向いているか分からない状態に陥りやすい。
そんな中、ヤスは冷静に判断しボ-ドを掴む事に成功していた。

腕がぱっくり切れている…あの時、フィンでやったか…。

波に飲まれながらも、どうにか陸へ…

『ヤス！大丈夫か？』

『……うす。』

とりあえずは良かったな…。

皆の場所から随分流されたな。こりゃシンドイな…。

女達と有弥がこっちに向かって走って来た。

『ヤス？』

『おお…なお…』

なおは安心したせいかいきなり泣き始めた。

『だから止めなって言ったじゃん！良かったあ…ホント良かったあ…。』

コマキは俺の所に、静は隆弘の所へ…安心した表情で笑みをこぼした。

『隆弘？』

『あゝ！』

『疲れたのお！』

『そうだのお！』

『こりゃヤスのおごりだなあ！』

『アハハハハッ！』

強風に煽られながら徐々に元気を取り戻すヤス。落ち着くまで少し時間は掛かったが、どうにかなったな…。

その後、傷の手当ての為、病院へ。

その後、ヤスにとっての悪夢…心配掛けた皆にご飯をおごる事に…。

これがマジナイハートを折ってしまったリスク？だったらまだいいのかもね。

波に飲まれた。怪我をした。おごる事になった。大変だったけど、これぐらいのリスクなら…。

見てるとなおと上手く行きそうだし…。何かムカつくけど！

第二章 1 恋心…故に…

この休みは散々だったな！

日曜は台風直撃で何処にも行けないし……まあ、筋肉痛で動けなかったってのが本音だけど…！

一日たった今日、いつもと変わらない日々が始まった。

ただ…変わったと言えば…

『何でお前等がいるんだよ！』

『へえ？いいじゃんねえ。ヤス？』

『蒼汰さん！そんな気にしないで下さいよお。迷惑かけないですよ！』

サ・フィンの事がキツカケで、ヤスとなおはお互いの気持ちに通じたのか付き合い始める事になった…。

そんなん知らねえよ！

『んで…そっちは？』

『沙耶？こちらはもう前から付き合ってるんだお！椎名先輩…残念でしたあ！』

『椎名先輩…すみません。ダメっすよ？沙耶は！』

だから、知らねえし！

『……んで？隆弘さん…。アナタ達は？何でいらっしやるのかしら？』

『ん？楽しいから！なあ、シ…！』

『うん！皆、一緒だと良いよねえ。』

何ニコニコしちゃってんのかねえ！バカチン軍団め！

こここの場所は俺の唯一の安らぎの場所なんだ！それなのに…こん

なにギャ・ギャ・しやがって！

昼休みの屋上、台風の後つてもあり雲一つない気持ちの良い天気！その貴重な時間を……

何を言っても聞かないバカチン軍団！結局、昼飯は賑やかに……、まあ楽しければいいのかな？

『蒼汰さん？』

『何だよヤス！』

『ちょ……怒らないで下さいよお！』

ドツと皆の笑いが……

イジリがいのあるヤス。ヤスのおかげで仲間が増えたって言うても過言ではない。

『冗談だよ、んで……何？』

『言いくいんですけど………』

『はい？じゃ言わなきゃいいじゃん！』

『……はい……でも、聞きたい！』

ヤスは満面の笑みを浮かべる。そして、真相を突いてきた。

『怒らないで下さいよ？』

『ああ！時と場合によるけど！』

俺は、コマキの弁当を食べながら耳を傾けた。

『蒼汰さん……ヤバいつすかね！』

『バカ！バカバカバカ！早く言えよ！バカヤス！』

『怒ったあ！……蒼汰さん……コマキ先輩と付き合ってるんすよねえ？』

ぶふうう！

な、何をいきなり！口に入ってる食べ物全部出しちゃったじゃんか！隆弘もろだし……

『マジありえねえ！飛ばすなよ！』

『お、わりい！でも、しょうがねえだろ？ヤスがさあ…』

……ん？

何だ？この沈黙は…。

コマキは静かに俺を見つめる。ヤス 有弥 なお 沙耶、皆俺に注目していた。

『さ、さあそろそろ戻るかなあ？教室に…』

誤魔化そう…コマキも笑って済ますだろ……あれ？弁当…片付けて…目を合わせない…あれ？

『蒼汰のバカ…』

俯きながら先に階段を下りて行ってしまった。

おいおい
…

2（前書き）

良かったら感想等宜しくお願いします。

『おいおい！コマキ！ちょ…まて…』

無視かよ…

バシッ！

隆弘はヤスの頭をひっぱたいた！

『お前そりやマズイだろ？仲間だつて聞いていい事、悪い事、最低の常識はもてよ！』

『すんません…。でも、凄く仲いいし…どう見ても…。』

ヤスは俺に深々と頭を下げた。

『いいよ…謝んなくて。実際…付き合ってた訳じゃ…ねえしな。』

『でも、ハッキリ言ってコマキ…可哀想だな…。』

コマキの親友でもある静。色々と相談も聞いていた。複雑な表情をしていた。

『蒼汰…何かずるいよね！ずっと曖昧な関係で…。コマキいつも言ってたよ？』

「蒼汰好きなんだあ」って！

「でも、蒼汰の気持ち…わからないんだあ」って…。その話する度に涙目になって…辛いと思うよ？』

『おい、シ…！』

『隆弘はいいから！』

静は真剣な眼差しで俺を見つめた。

『蒼汰？そろそろ楽にさせてあげてよ！コマキ可哀想で見えられない！決めるのは蒼汰だから……。』

ずるいか…

放課後になり、皆徐々に帰り始めていた。

『蒼汰？悪いな…静、言い過ぎだよ…ちゃんと言っとくからよ！』

『いいよ…言われて当然だし！そんなんで隆弘達がケンカすんの見たくねえし！』

『そつか…んじゃ先帰るぞ。』

『ああ、またな。』

椅子に座ったまま、時間だけが過ぎていった。いつもなら、
「蒼汰！帰るよん♪」とか言ってコマキが来るんだよね…。

いて当たり前の存在…。いなくなって初めてわかるんだな…。

考えながら外を眺めていた。

『蒼汰？どしたん？』

ん？後ろを振り向くと綾がいた。

『ああ、ちよつとな!』

綾は俺の前の椅子に座り…

『どしたん?んな落ち込んだ蒼汰見るの初めてじゃん!』

『まあ、気にすんなや!はやく帰れえ!』

『……。』

俺はまた夕陽を見つめた。

『蒼汰?』

『ん!』

綾は俺の唇にキスをした。

時間が止まった。ほんの一瞬だった…。

何で？

『頑張つてね…。』

綾は足早に教室を出ていった。

何で？

綾は……。俺…どうしたらいいんだよ！誰か教えてくれよ…

頼むよ…

帰り道、いつも皆で歩いてる道。今日は一人で歩いていた。

途中、いつも寄るゲ・セン…一人で入った。

コマキとやるメダルゲーム。コマキがいれば凄く盛り上がる。
—
人だと…

ただボオ…とボタンを押してるだけ…つまんねえな。

早々と店を出て夜の道を歩いて帰った。

さぶっ！

ヤケに寒く感じた。この寒さは季節的なのか、それとも……

『ただいまあ！』

『おかえり、蒼汰！ちよつといい？』

玄関で靴を脱ぎリビングへ。

『ん？』

『うん…コマキちゃんだっけ？元気してる？』

『……うん、まあね』

姉貴の事だから、ケンカしてるなんて知れたら何言われるか。

『んで？ご用件は？』

『蒼汰…何かあった？』

『はあ？何だよいきなり！』

『今日さあ、コマキちゃん…夕方見かけてさ。一人泣きながら歩いてた。いつも一緒に帰ってると思ってたからさ。』

そっか……

『ありがとよ！』

『オマジナイ、仲直り出来ますようにって書いてあげようか?』

『ガキじゃあるまいし! いんねえよ!』

階段を上がり自分の部屋へ。

荷物を置き、床に座り込んだ。CDを流し、テレビを付けた。音楽を聴きたい訳でもないし、見たい訳でもない。気を紛らわしたかった。

分かりきっていたが、紛れるもんでもない…。

ベッドに寝転がったり、腕立てしてみたり…最後には机に向かったり…。

何やってんだ…

おもむろに開けた引き出し…そこには昔吸っていたタバコ…。封は開いてなかった。

そっいえば高校入ってから止めたんだよな…。

ああ…逢いてえ…

番外編 純粹ゆえに…（前書き）

中学時代の話です。

番外編 純粹ゆえに…

俺と隆弘はいつもつるんでいた。学校が終わると決まって街に繰り出す。

家に帰るのが嫌だった…。勉強しろ、悪い仲間と遊ぶな、髪の毛染めろ、タバコ吸うな。毎日の様に言われていた。そんな場所から逃げたかった。

『今日は蒼太だかなあ！』

『嫌だよ！隆弘やれよ！』

何の為に街に行くのか…それは彼女を作る為。勇気を試す為。男を磨く為…。

ガキの頃は、ナンパ出来る出来ないで自分自身の器量がはかられた。今思えばバカバカしい事だけど……。

『俺は早く彼女が欲しい！だから頑張れ蒼太！』

『バアカ！何で俺なんだよ！お前が死ね！』

当時の俺は、金髪のラフなツンツンスタイルで、左耳に三つのピアス。服装は制服だったけど…

隆弘は、アブリコットカラーのトンアップしたメッシュ。両サイド後ろに固めたウルフっぽいスタイル。隆弘も一っだけピアスをしていた。服装はもちろん制服。

俺達はタバコを吹かしながら街を歩く。可愛い女がいれば…

『蒼太、あれすっげえ可愛い！俺好み。行け、蒼太！』

『俺パス！』

俺が良くても隆弘がダメ。隆弘が良くても俺はパス…

結局、毎日行っても一回もナンパした事ないんだよね…。意気地がないって言うか…

そんな時、若いのが集まる街つてのもあり、熱くなった奴等がもめる……そう女の取り合い！

ここ、ナンパ通りはナンパをしたいされたい、そんな人間が集まる場所だ！ケンカなんかしょっちゅうだな。

『おい！隆弘…やってるぜよ！』

『お？祭り？祭りだワッショイ！行くぞお！』

野次馬根性丸出しでよく見に行つたな…。時には巻き込まれ一緒になってケンカした。

この時もそうだ。見てたら何かケンカ売ってきて…

『んだコラ！調子のんなよコラ！』

『コラコラ…コアラ？アが足んねえし！』

『舐めてんのか、ああ？』

『お前舐めたらキタネエだろ？なあ隆弘？』

『お前じゃ無理だよおん！お帰りお嬢ちゃん！あははっ！』

くくくつ…

俺達の小馬鹿にした挑発。それを見て笑い出すギャラリィ。その瞬間が好きだった。

興奮気味の男…絶対仕掛けてくる！

『そこの今笑った女！後で行くかな！こいつらの後で…』

コイツ等の後…はあ？

『隆弘？俺一人でやるわ！何か調子乗っちゃったみたいだから！』

『はい！お願いしますう。』

隆弘は周りをキョロキョロし、さっき笑ってた女の子を呼び出し、その場に座り込んだ。

『ベストポジションで見せてあげるよ！』

隆弘はちゃっかり横に女を座らせご満悦な表情を浮かべる。

『ああ！隆弘…お前調子乗りすぎ！』

『バカ！こつち見んなよ！』

案の定、相手の拳が顔面を捉えた！

『キャ！』

隣に座る女の子、周りのギャラリィ。行けだのヤレだの…ヤジのオンパレードやなあ…。

『いいパンチしてんなあ！倍返しな！』

俺はガキの頃から空手をやっていた。ボクシングもかじっていたせいか、ヤケに手が早かった！

結局、10分もしない内にダウン…勝てないとわかると速攻で逃げろ！もちろん、その女の子も連れて…。

『蒼太しよつぺえな！』

『ありゃヤバいだろ！絶対プロだよ…いてえ…。』

正直、隆弘の隣の女の子が気になっていた。カッコ良い所を見せようとしたが、カッコ悪い所を見せてしまった…

でも、あのまま俺達だけで逃げたら、この子は…

そしたら体力がある内に逃げるのが…

そんな事を、ない頭で考えた結論だった。

近くの公園まで走り、俺は力尽きた。

俺、体力落ちたなあ…。やっぱりタバコかなあ…。

ハアハア…

女の子は息切らせながら俺に近付いて…

『ごめんねえ？私のせいで…負けちゃったねえ。』

『……ま、負けちゃいねえよ！謝ってねえし！』

『蒼太！それ往生気が悪いって言うんだよ！』

『バカ！隆弘のバカ！タバコがいけねんだよ！気付いたら体力落ちてるしよ！俺…タバコ止めた！』

『蒼太にやむりだあ！そんな意思強くねえし！』

『あはははっ！面白いねえ！』

俺達の口ゲンカが蓄だつたみたいで、一人笑っていた。そして、俺達も調子に乗ってお互いをけなしあった。

で……その時、名前とか携帯聞いておけば良かったんだよね……。

ナンパとかに全くなれてなかった純粹なあの頃……

あの子にもう逢えないんだろうな……

でも、出来れば……また……逢いたいな……

逢って……今度はナイトになる！

で…時が経ち…

この高校で再開した。その時の女の子がコマキだったんだ。

『はっ！』

あれ？俺…眠っちゃったんだ…

憂鬱…

でも…行くしかないか。

アスファルトの上を、一歩…また一歩。足に鉛が付いている…その位足取りが重い。

教室に着くと綾がいた。いつも通り春菜と話す綾。

俺に気付く綾。

春菜を待たせて歩いて来た…

そのまま俺を引っ張り廊下へ…

『蒼太、おはよ。昨日の事は気にしないで………ね?』

一言、そう呟き春菜の元へ走って行った。

はあ? 悩みの種だろ?

だから女は嫌なんだよ…

俺は自分の席につき、また空を眺めていた。

『蒼太?』

後ろから呼ぶ声。

隆弘だ!

『あ? 何…?』

『何じゃねえだろ? ちょっと…ちょっと来いよ!』

んだよ…今は動きたくねえんだよ…

教室のベランダに呼び出し、何をするのかと思えば…

『コマキ…連絡とったん？』

『いいよ！ほつとけ！』

『お前…バカ！ほつとけつかよ！』

『いいんだよ！あんなんでキレちゃってよお、何なんだよ！』

俺は大声で怒鳴ってやった！隆弘を始め、クラスが静まりかえった。

隆弘と俺の関係も、何か微妙な空気が漂った…

俺は教室を出て、一人いつもの屋上へ向かった。

何なんだよ…

何もかも上手く行かねえな！

クソッ！

仰向けに寝転がり、空を見つめる。

隆弘に当たるつもりはなかった…

ただ…そっとしておいてもらいたかった…

ドンドン孤独になっていく……そんな自分に気付いた。

孤独の寂しさ…

コマキだけじゃなく親友の隆弘まで……何かが込み上げてくる……

え……

自然に涙が零れ落ちた…

俺は一人屋上で泣いた…。

寂しさに押し潰されそうに怖かった…。

孤独はもう嫌だ！

屋上のドア付近で人が…

今……人の気配を感じた。

気配を感じた…

振り向くと…

誰もいない…気のせい…

涙を拭い、流れる雲を目で追った。

自由だな…

目を潤わせながら空を見つめる。
何も考えず雲を見つめる。

どの位の時間が足ったのか…

目を瞑り、風を感じる…

風の音、鳥の羽ばたき、グラウンドから聞こえる人の声…

目を瞑るだけで、目では見えない違う世界。俺にはコマキが見える…めっちゃ笑顔だな…

コトツ…

コト？コトって何だ？
ええ…何だろ…

目を徐々に開いた…

そこには想像以上にニコニコしているコマキがいた。

『わぁ！』

俺は思わず少し逃げてしまう。

そんな俺の行動を見て…

『蒼太、逃げないのぉ！』

怒るフリをするコマキ。

『今日のお弁当だよ。はい！』

何が起こったんだか全くわからない…

いつからいたんだ？

『あれ？いつからいたん？』

『ん？ずっといたよ？』

『え…ええ？俺…一人で…だったよなあ…』

『寝てたじゃん。』

寝てた？気付かぬ内に寝てしまったのか……

『もしかして…昼休み?』

『うん。』

コマキはドアの方を指差した。俺は差した方を見てビックリ!

隆弘達が飯食っていた。ヤス達と…

『蒼太、早く来いよ! 食い終わっちゃうだろ?』

『蒼太さん、一緒に食べ… ああ! 隆弘さん、俺のタマゴ焼き! ……
なおの愛があ…』

隆弘は口いっぱいにヤスのタマゴ焼きを頬張りながら手招きした。

皆笑顔だ…

コマキも笑顔だ…

俺はまた視界が歪む…

『おう、今行くぜ！コマキ行くぞ！』

『うん！』

俺の考えすぎだったのか…。でも、繰り返したくはないな。

皆…一生仲良し。

そんなお願いもいいのかもな…

コマキ…もう怒ってないのかな…

俺自身は何も変わってはいなかった。それなのに何で…

その夜、たまらずに隆弘に電話した…

『よっ！隆弘？』

『どうしたんよ！』

『あのさ…怒鳴ったりして悪かったな。』

『いつもの事だろ？』

……。

『…後…コマキ…怒ってなかったじゃん？』

『あはっ！気になってんじゃない！』

『うるせえ!』

話によると…

俺が怒鳴って教室を飛び出した…

いつまでたつても戻らない俺を心配して…、隆弘と静が昼休みにコマキを連れ屋上に向かった…らしい…

そこで皆が見たのは…

俺が大の字になって寝てる光景。

午前中の授業をサボり、ずっと屋上で寝ていた俺に呆れて起こそうと…

『コマキ…』

俺は寝言でコマキを呼んでいたらしいんだ…その時、何を言っていたのかは秘密だ…

その時、コマキは顔を真っ赤にして照れていた…らしい。

隆弘と静は、コマキに気を使いその場から離れた。ちょうどその時にヤス達も来たって。

隆弘が言うには…

コマキは寝てる蒼太にキスをした……後ろを振り返った時に見てさ…騒ごうとしたらシ・に殴られて……

『俺が言っ たって言うなよ！マジで！シ・に殺される！』

かなりご機嫌なセリフを吐いたんだろうな…

『それからずっと蒼太の側にいたぞ？コマキ…チラチラ見てたな。早く起きないかなあって。』

『そっか……嬉しいけど…何言っ たんだ俺は！そっちの方が気にな

るぜよ！
』

でも、内心ホツとしていた。

多分…隆弘がこのままじゃマズいと思い何らかの手を使い静とやら
かしたんだろう。

ありがとな…

第三章 1 見せない零

『蒼太？鼻から白い煙出てるよ？』

『コマキだつて出てんじゃないか！』

徐々に寒くなり季節は冬直前…

俺達はいつもの様に街に寄っていた。

『蒼太さ〜ん！何処行くんすかあ！』

『何処だつていいじゃんよお！付いてくんな！』

今まで四人で行動をしていたのに、最近…何故か八人に…。

ゾロゾロキヤツキヤしながら楽しく歩いていた…

『続きまして、今流行りのマジナイハート…』

はい？

何か聞こえる…

センタースクリーンでマジナイの特集がやっていた。

イテッ！後ろを歩いていたヤス達が玉突き事故の様に俺に突っ込み
渋滞中！

『蒼太？どしたん？』

コマキは玉突き事故に少し笑みをこぼし問い掛けてきた。

『ああ…ちよつと待って？』

『蒼太さーん！めっちゃ渋滞っすよお！』

『もおー、しっ！』

俺はスクリーンを見続けた…

『関東で噂のオマジナイ。その名もマジナイハート。誰でも一つお願いが叶うと言う不思議なオマジナイ。若者の中で凄い人気なんですよね。』

て、TVに取り上げられてんのかよ…

真面目に叶うって事かよ…
元々は俺のガセだぞ？

『蒼太、行くぞ！』

『ああ…』

隆弘に呼ばれ渋々その場から離れた。

『なあ…今、マジナイTVでやってたな。』

『うん、蒼太も叶ったん？』

『嫌…まだやってないけど…』

マジかよ…

『椎名先輩？寒いからちよつと暖まりにゲ・セン行きませんか？』

有弥は沙耶に手を暖めてもらっていた。

『行きましょうよお、隆弘さん！』

『んだね！シ・行くぞい！』

『今日何しよつかあ。』

隆弘と静は先に店に入っていた。二人に続き有弥と沙耶。

『先に行っちゃうお』

ヤスは少し気にしながらコマキを見、俺を見た。

『蒼太さん？行きますよ？』

『……先行つててよ。後で行くから……』

『わかりました。なお、入ろ？』

『はい！コマキ先輩、椎名先輩後で遊ぼ？』

『うん、後で行くねえ。』

『どしたん？…蒼太。』

『ん？…マジナイが気になってな…。』

夢…ただの夢だったよな。

コマキは寒そうに手をさすっていた。

俺は寒そうにしてるコマキの手をソッと握った…

少し驚いたコマキ。

そして、少し照れながら寄り添った。

『コマキはマジナイやった？』

俺は照れを隠す様に……遠くを見るフリをした…
正直、照れていた。

『書いたよ。』

『どんな願いにした？』

『……内緒！』

『叶った？』

『……内緒！叶ったら教えてあげるよ。』

うつすらと笑みを浮かべる二人…

どれだけ寒くても…暖かいな…。今、この一瞬の時間が止まればいいのに…。

それが今の俺の願いなのかもね…

コマキと二人、少し歩きながらショップを見て回った。

『ねえねえ蒼太？これめっちゃ可愛い！』

『ん？……Cartier！』

コマキは Necklace にみとれて、その場から離れよう
としない……

『宜しければ、お付け致しましょうか？』

『ええ！良いんですか？』

おいおい……店員、余計な事言つなよなあ……。

『お似合いですね。モデルが良いとより一層際立ちます。』

『蒼太！似合う？ねえ蒼太！』

コマキ……目がNecklaceに負けないくらいに輝いてるよ……

『に、に、似合うよ。』

どもってしまった。
でも、ホントに似合うな…

『彼氏さんですか？Xmasにプレゼント、喜んで頂きますね。』

店員…笑えねえぞ！

値札を見ると…

C a r t i e r Cハート…¥19800

『ぬ…ま、まあ高くはないよね。』

『え！ホント？』

『こちら、¥198000になります。』

はい？

……一桁違う？

『あ…まあ…ね。他も見て見ようかなあ…。』

店員はニコツと微笑み商品をガラスケースに戻した。

俺は周りをキョロキョロと…その場から急いで離れた。

『そおたああ！似合ってた？』

『めっちゃ似合ってたなあ。』

『可愛いかった？』

『うん、可愛いかった！可愛いかったよ！』

『その言い方嫌だあ！もつと心込めてよあ……蒼太、コマキ可愛い？』

『バアカ！早く行くぞ！』

『もう、蒼太のバカア！』

コマキは俺のシャツをつかみ、ブウブウ言いながら歩く。

『ねえ蒼太？』

『ん？』

『うちら、周りからどんなん見えてるんかなあ？』

『どんなんやろねえ！』

『いいもん』

シャツを掴んでいたコマキ。俺の腕をとり寄り添いながら街を歩く。

違う店を見ては『可愛い？』コッチの店で『可愛い？』……

疲れるなあ……

でも、こんな喜ぶコマキ……可愛いな……

結局、何も買わずにゲ・センに戻る事に……

ん？

店内が何か騒がしいな……

ああ？有弥じゃね？

店の中に入ると隆弘、ヤス、有弥と他校の制服着てる五人組が睨み合っていた。

隆弘達の後ろに静、なお、沙耶……。
なおと沙耶は今にも泣きそうに…

何してんだ…

『おい！何、調子こいてんだ！』

他校の奴等が怒鳴り散らしていた！

いかにもバカっぽい奴等だな…

コマキに女達と店を出るように指示し、俺は隆弘の元へ向かった…

『隆弘、どうしたんだよ！』

『あ？こいつらマジム力つくんだよ！』

『隆弘さん！マジ殺しますかあ？』

隆弘もヤスもやる気全開かよ…有弥は……！目つきが違つよ…

『ちょ…待てよ！お前等誰だか知んねえけど、喧嘩なんか辞めようぜ？めんどいよ！』

『お前こそ誰よ！チキンは下がれや！』

確かに…ムカつくな…。

俺は隆弘の耳元で呟く…

『隆弘…女達を先に逃がす。その後でくらわすかあ…。』

『コイツ等余裕だべ！』

コマキに店から出るように目で合図した…

『な…にコソコソしてんだよ！』

蹴り？振り向き様に…紙一重で！

いきなりかよ…

立て続けにもう一人が拳を振り回してくる…

寸前の所で避けた。コイツが仕掛けてきたお陰で、乱闘が始まってしまった。

隆弘は蹴りを入れてきた奴の顔面を殴り、壁に叩きつけた！

ヤバいだろ…まだ、女達はここにいるんだぜ…。

コッチは四人…か…

『コマキ！取り敢えず連れて逃げろ！』

『うん！早く！』

コマキはなおを。

静は沙耶の手を引っ張り店を出ようと…

一人の男が行く手を阻む！

『可愛いじゃん？何処行くん？』

『はあ？かなりウザいし！』

静と沙耶は辛うじて店の外へ…

『ちよっ…マジ触んなよ！』

『はーい、残念でしたあ！』

な！コマキ…

後から出ようとしたコマキとなお、出入口口で男に腕を捕まれていた！

『コマキ！早く逃げろ！』

『お前の相手は俺だろうが！』

集中出来ない…

顔面に二発、腹に一発…

くっ…

余所見してる場合じゃない！コマキ…早く逃げろ！

隆弘は相手を追い込み優勢に…

ヤスと有弥も四人で絡んで何とかなってるな…

俺が行ければ…

そんな時…

『離してよ！』

コマキは必死に抵抗…

バチン！

頭にきたコマキ！男におもいつきのビンタ！

『なお！先に行つて！』

その隙になおを表に押し出した！

『いつて…んだデメエ!』

『あんたがしつこいからいけないんでしょ?!』

男は逆上し、コマキを思い切り突き飛ばした!

『キャッ!』

軽いコマキは、予想以上に吹っ飛び倒れ込んだ!

『コマキ!』

コマキが吹っ飛んだ…

コイツ…殺すか…

頭の中で熱く込み上げる物を感じた…。そして、その瞬間、込み上げた何かが弾けた…

『お前…覚悟しとけや!』

今相手してる奴の胸ぐらを掴み、顔面に頭突きし、胸元に蹴りを入

れた。男はバランスを崩し倒れこんだ……今だ！隙を見、走り出した。

そして、コマキを突き飛ばした奴に跳び膝蹴り！

顎にヒット！

そいつは勢いよく外まで吹っ飛んでいった！

俺は、すぐにコマキの元へ…

『コマキ、大丈夫か？』

『痛いよお…あ！蒼…あぶ！』

ゴキーン…

な…何だ？

今までにない激痛……

何だ？頭が…痛い？…熱い？

鉄パイプを握り締めていた男…

一瞬…物音一つない空間と化した…

『イヤアアア！蒼太…蒼太…』

コマキの叫び声に皆が反応した…。

『蒼太！』

隆弘…あれ？

今、喧嘩…勝ったんか？

あれ…体…動かねえ…

『テメエ！マジ殺す気かよ！』

『蒼太さん！ヤバいつすよ！おい！テメエ等逃げんなよ！』

ヤス…有弥…顔、モロにやられたなあ…

『隆弘、早く何とかしてよ！止まらない！早くう！』

コマキ…何で泣いてんだよ…。

こんなに強く抱き締めて…胸…当たってるぞ？

意識が徐々に遠のく…

ん？コマキ…すげえ血…俺がコイツ等…ぶっ潰してやるか…らな…
守る…から…

『蒼太？蒼太？…蒼太！………』

あれ？耳が…皆の声が遠のく……。
目の前が真っ白く…

ここは何処だ？

白い空気に包まれた様な空間に俺は一人立っていた…

……ん？

隆弘と静じゃん…

二人で歩きながら近付いてきた…

何だよ…その情けねえ顔は…

大丈夫だったのか？

何もなくて良かったな。

隆弘は何か喋っていた…。だが、俺には聞こえてこない…

何かを必死に訴えている…

ごめん…何にも聞こえないんだ…

静は隆弘の胸で顔をうずめ泣いていた…

そして、二人は静かに消えていった。

誰だ？四人… あ、ヤス達か！

ふっ… またなおと沙耶のコントみたいな会話してんのかよ…

ホント仲がいいな…。いつも楽しそうだもんね。

ヤスも有弥も元気そうだな。凄い顔腫れてたもんな… もう大丈夫そうだな。

俺も… 思いつき騒ぎてゝな！

あれ？また皆スッと消えてしまった。

何なんだ？

……綾。

俺の真横に立ち、口を尖らせている綾。そして、また何か話している。

俺…耳、聞こえなくなったのか？

お！春菜

春菜が来た瞬間、綾は泣き始めてしまった…。

春菜は俺に向かって何か…やっぱりわからない……。

また…消えた…

俺…どうした？
夢…だよな…。

これが現実？

……死んだ……のか？

…コマキ！

泣きながら何か話している…

どうした？何で泣いてんだよ…

徐々に俺とコマキが離れていく…

泣きながら俺の事を追いかける！

必死に追いかけるコマキ…

だが、距離は縮まる所か広がるばかり…

…コマキ。

……蒼太

……起きて

『蒼太！目を開けて！』

……ん……

俺はゆっくりと目を開いた。白い天井？

ここは何処だ？……病院？

周りを見回すと、すぐそこにコマキが椅子に座り首をカクンカクンさせながら居眠りをしていた。

コマキ？

こういうの少し照れるよな……

そんな事を思いながらコマキの頭を撫でた。そして……

『コマキ、おはよ。』

コマキはビクツとベッドに足をぶつけ目を覚ます。

目を擦りながら

『…蒼太？』

何だ？寝ぼけてんのか？

『……蒼太！』

コマキは目に大粒の涙を浮かべ勢い良く俺に飛び込み、おもいつきり抱き締めてきた！

『蒼太、蒼太！』

コマキ…心配してくれてたんだ…

でも…

『いつ…コマキ……痛い……なあ……』

『ああ！ごめえん！』

そっか…あの時、おもいつきり頭殴られて意識無くしたのか。

コマキの声が聞こえたのか、廊下から隆弘と静が病室に入ってきた…

『お？パイナポ - 復活したな！』

『コマキ！良かったねえ！』

『うん！良かったあ！』

皆、心配掛けたな。でも…パイナポ - ってたんだ？

『ちょっと待ってな！』

隆弘はそう呟き、急いで病室を出た。

『なあなあ！』

『ん？』

『パイナポ - ってたん？』

コマキと静は顔を見合わせ、俺を見て笑い始めた！静なんか、指ま

でさしてだぞ？

『な……。』

『蒼太の頭だよお！』

コマキはバッグから手鏡を出し、手渡してきた…

『おお！……確かに！』

『あはははっ……』

そんなに笑わなくても……。

笑いが止まらない……。コマキなんか特にだ…

『あゝおもしろいねえ。笑いすぎて喉乾いちゃったあ！何か買ってくるね。』

そう言って、コマキは病室を出て行った。

静も涙を拭き椅子に座った。

『蒼太？ホント良かったねえ。コマキ…緊張がほぐれたのかなあ？』

『どした？いきなり…』

『ん？うん…コマキ、ずっと暗かったんよ？私や隆弘が何言っても（蒼太の側いる！）って…。コマキのあんな顔見たくなかったなあ…。』

『…………。』

『でも…私も安心したな！コマキも安心して笑いが止まらなくなっちゃったのかもね。』

『わりいな…コマキ、支えてくれたんだな。』

『…私に謝るくらいなら、今度、心配掛けた人皆にご飯おごりだね！』

まあ…しょうがないよな…。俺なんかの為に、こんなに心配してくれる奴等がいるんだな…

静と少し話していたら、隆弘が戻ってきた。

『悪いな！ヤス達にTELしてたんよ！……シ、ちょっといいか？』

『ん？』

『……蒼太と話があつて……ちょっと外してくれる？』

『……あ！まあた何か企んでるんでしょ！』

『ち、ちげえよ！』

『あつそ！いいよ、コマキとお茶しいてよ。』

静はニコニコと笑みを零しながら病室を出て行つた。

『どした？』

『……蒼太さあ、ホント愛されてんなあ！』

『はあ？』

隆弘……いきなり何言つてんだよ……

『コマキ……自販機ん所で大泣きしてたぞ！緊張の糸、ほぐれたって感じだったな。もう泣かせんなよ？』

『……ああ！』

隆弘も静もありがとな……

俺達の心配までしてくれる最高の仲間だよ…

『君達！病院内は走らないで！』

『はーい！』

ん？廊下の方が騒がしいな…

『蒼太さん！復活したんすかあ？』

『椎名先輩だあ！』

ああ…問題児集合ね！まあた騒がしくなるぞ…

でも…凄くいい仲間だ！

第四章 1 冬の暖かさ…

徐々に雲も空高く流れる頃…

北風も吹き始め、より一層寒さを増していた。

街にはコートを着てるサラリ・マンや、ダウンを着た人が目立っていた。

頭の包帯も取れて、周りを気にせず街を歩けるようになった俺…

って言っても、街に来たのはあの乱闘事件以来だった。

『蒼太？』

『ん？』

今日は珍しくコマキと二人で帰る事に…

『何か新しい雑貨屋出来たみたいなんよねえ。』

コマキ…なんで目を輝かせる？

『な、なあ…』

『はいはい行きますよお！』

コマキに袖をシッカリ掴まれ…ある意味連行される様な心境……。

メインロードを歩いていると、すっかりクリスマス模様に大変身！

『わあ！めっちゃ綺麗だねえ！』

電飾を見ては指差して『あれ、可愛い！』って…

周りをキョロキョロ見ながら微笑むコマキ。まるで汚れない子供の様だ。

コマキと二人、この道を歩いているだけで暖かくなれる…そんな気にさせてくれる。

メインロード沿いに建つアジア雑貨屋。

周りはイルミネーションで飾られ華やかな雰囲気。

なのに…何故？

お店の外見は黒一色の木の壁。上下七つのライトで照らされていた。

浜辺に打ち上げられた様な木の破片で組み立てられたお店。

『ねえねえ蒼太？』

『あ？』

『ここでもいいのかなあ…』

『……。』

看板も名前もない異様な建物が、俺達の前に立ちふさがる！

『噂だと……ここ！』

コマキは少し不安そうに…俺を後ろから押してきた…

コ、コマキ…

『…………んじゃ…入ろつか…』

勇気を振り絞り、手に汗握り…いざ店内へ！

扉を開くと店内は薄暗く、独特な香りが漂っていた。

店内をゆっくりと歩いて廻っていた。そんな時…

『蒼太、蒼太！』

後ろを歩いていたコマキ。何か見つけたみたいだ。

俺は『ん？』って振り向き…

『わっ！』

コマキは、赤い毛糸で巻いたおっきな人形を顔の前に突き出した。

『何だろねえ、これ…』

不思議そうな顔をするコマキ。でも、何だか楽しそうだ。人形の手足を動かして遊び始めた。

『なんかコマキに似てんな。』

『そお？……ありえないけどお！』

笑みを零すコマキ。人形を元の位置に戻し他の人形に手を出す。

俺は、その人形を手にし棚を見た。

……何か書いてある。

アジアで人気のポップア・ジユ…

ポップア・ジユ？

なになに？これを身近な所に置いておくと幸せになれる……

んな訳……

その人形を置き、周りの人形を見回した…

あれ？いろんな国の人形……。それも、幸せになれるとか願いが叶うって言う歌い文句ばかりだ！

……ん？もしや……

『蒼太？どしたん？これ、可愛い……蒼太！』

俺は、コマキに話しかけられても気付かないフリをし、あるものを探していた……

そのあるものとは……

ここは……フランス。
ここは……ブラジル……日本は……

……あつた！

俺が手にした物、それは…

マジナイハート関連のグッズ。

マジナイハート用色紙やハサミ。

ハート保管ケースなんてのもある……それも可愛い！

ん？これも何か書いてある…

日本で一番人気のマジナイハート！誰もが叶うオマジナイだよ！知らない人はもういない！皆で幸せになろう！

おいおい…ガセだぞ！それに俺が考えたマジナイ…特許申請しときゃ良かったよ……

いてっ！

後ろから物を投げってくる……「コマキ！

『蒼太！コマキをほったらかすな！』

『ごめん…コマキ、これ！』

俺は、マジナイグッズをコマキに手渡した。

『ああ！マジナイだあ！それもピンクいねえ！めっちゃ可愛い！』

コマキは、ピンク色のハート模様の写真立てみたいなケースを微笑みながら見つめていた。そして…

『蒼太…これ、可愛い！』

『…………ああ』

コマキ…その笑顔…ずるいぞ！

このパターンは買ってくれって言うサイン…。

俺は嬉しそうにしているコマキを見ていると幸せな気分になる……でも、今は見てはいけない時なんだ！

『うん、可愛いね！良かったね！じゃ行こうか！』

俺は即座に店を出ようと…

…は、早い！

シャツを掴む手…。こういう時のコマキはとても素早い！陸上選手でも勝てないだろう…

『蒼太？』

可愛いく微笑むコマキ。その笑みは可愛いくもあり怖くもあった…。そして買わされる事に…

でも、噂だけにとどまらず、商品化するとは…。

確かに周りでも叶う叶わないと言う噂は耳にしていた。

まさか…ホントに叶う……のか？

店を出ると日も沈み始め、暗くなるにつれイルミネーションが一際輝く。

俺を盾にし直接風を浴びない様にするコマキ。

時に走って逃げたり、止まってみたり。

何をするんでも笑ってふざけて…

ちょっとした幸せな一時…

途中、自販機でコーンスープを買うコマキ。

『蒼太は何飲む？』

『ん？しるこ！』

『え？』

『……何だよ！』

コマキは驚いた表情をし、少し戸惑いながらもボタンを押した。

『はい!』

『ありがとう!あちっ!』

コマキはしるこを飲む俺を見ながらコンス・プを飲む。少し嫌そうな顔をしながら……

『蒼太……んまい?』

『コマキ!お前飲んだ事ないの?』

昔から甘党な俺。特に和菓子の小豆系は無類に大好物。そんな俺に『うまい?』なんて言葉こそありえない話だ!

『飲んでみるか?』

『……うん』

俺は飲みかけのしるこを差し出した。

コマキもコース・プを渡してきた。

『おしるこだよ？めっちゃ甘くない？』

『当たり前だろ？甘くないしるこなんかねえ！』

どこの漫才師のマネをしコマキを笑かそうと……無視……

……気を取り直しコマキからもらったコース・プを飲んだ。

『あ、蒼太関節キスしたあ』

思わずこぼしそうに！

『ゲホッ！アブね、いきなり……ゴホッ！』

今時関節キスって……。でも……なんか意識したら少し照れるな……

『コマキだつてしるこ飲んだら関節キスじゃんさあ！』

『……………』

コマキはそつと口をつけ、しるこを一口口に含んだ。

『なあ？しるこうめえだろ？』

『蒼太とキスしちゃったあ。』

口から白い息をはきながら微笑むコマキ。

この時、なんか胸がキュツと締め付けられるものを感じた。

暗くてわかりにくかったけど、頬がほんのり赤く染まっていた気もした。

関節キスと言われて照れてしまった俺。逆に関節キスと意識したまま敢えてするコマキ。

冬の寒さでさえ心地良く感じさせてしまう一時…

二人暖まりながら…少し照れながら街を後にした。

第五章 1 いない人

あれ…夢？

また変な人…

何でいつも俺を見てる？何か文句があるんならハッキリ言えよ！

『あなたは、いない人…』

は？

一筋の光が俺の目を照らす…

眩しい…

何なんだよ…

光を手で遮っても貫通…何だこの光！

ガバツ…

布団をめくり上げ、勢いよく起きた。

あ…眩しかったのはこれが…

寝る前にカーテンを閉め忘れ、朝の日差しに照らされていた。

夢…だよな…

冬なのに体中、汗をかいていた。

俺は…いない人…

『蒼太？朝ご飯だよ？』

ドアの向こうから呼ぶ聲。

『ああ！』

制服に着替え、とりあえず下に降りる事にした。

リビングに行くと、おかん、そして遙が椅子に座り朝食を食べていた。

『おはよ!』

俺は挨拶をし、遙の隣の椅子に座った。

『蒼太、昨日遅かったねえ! コマキちゃん?』

玉子焼きをつつきながら話掛ける遙。朝から鋭い質問をしてきた…

何か嫌な予感…

『ああ、そうだよ!』

俺は味噌汁を啜りテレビを見ながら軽く流した。

『コマキちゃん、良い子なんだから泣かせちゃダメだよ?』

『はいはい!』

俺がいつ泣かせた？話に付き合ってたら時間がいくらあっても足りない。

そんな時…

テレビ番組で特集がやっていた…

『今日の特集です！この冬人気のマジナイハート、グッズを出している店舗数、急増中！』

あゝあ、すげえな…

『あ！蒼太知ってる？』

遥…いきなり大声だすなよ…

『なに？』

『これホントに叶うんだって！私の友達も叶ったって！』

『遥、行儀悪いわよ！』

口からポロポロとご飯粒をこぼす遥…。遥はかなりマジナイにハマってる…らしい。

最近、そんな話を良く耳にしていた。実際に……ヤスは叶った……のか？でも、ありえない事が現実化してるのは事実だ……

『私の願い叶ったんですよ！』

『あははっ、良かったですね。では、次の特集です………』

テレビのアナウンサー - 軽くあしらわれてるし……

俺の夢から始まったんだよな……。今日の夢も……

俺はいない人……

少し不安はあった。

あんま気にしても始まらないから……とりあえず学校に向かう事にした。

教室に入るといつもの様に騒がしく、アチコチからマジナイの話題が飛び交っていた。

俺は、荷物を担ぎながら席に向かった。すると、席には綾が座っていた。

『おう、おはよ!』

ドカツと荷物を机に置き、綾に話し掛ける。

『おはよ、蒼太…朝見た?』

『マジナイだろ? 上げえなあ!』

『はい? 違ってえ……』

あれ? 俺はてつきり朝の特集の話だとばかり思っていた。

『なになに! 深刻系?』

そこに隆弘が交じってきた。

『え？……春菜が見ただけどお…春菜！』

春菜を呼ぶ綾。場所を教室の隅に変え話し始めた。

『今日の朝ねえ、なんかあ渡辺と三橋が仲良さげに歩きながら話してんの見たんよお！』

春菜は何故か楽しそうに話していた。

『……んあ？そうなんだ…』

まあ、俺には関係ない話だよな！

『渡辺つてどの渡辺だよ！』

隆弘の雰囲気急変した…

『ええ？隆弘…何？怒らないでよお！なんか怖くない？』

『いいから言えっ！』

おい…隆弘…落ち着きなさい！そんな感情剥き出しにしたら春菜…可哀想でしょ？

渡辺って名字なんていくらでもいる。そんな事を思い、余裕がまし
ていた…

『ん…隣のクラスだったかな？コマキちゃんだよ！三橋も同じクラスで結構カッコイいんよ！』

……マジ！

『何かあ、見ててむっちゃいいなあって…。あれ、隆弘？』

隆弘は何も言わず教室を飛び出した！

『隆弘！』

俺も後を追う様に走り出した…

向かった先は…隣！

『おい！三橋いるか？』

Bクラスで怒鳴り散らす隆弘。

『隆弘！どうしたん？』

慌てて止めに入る静。いきなりの出来事で少しアタフタしていた。

『シ…はどいてろ！』

静を強引に引っ張り、教室にいる一人一人を見回した。

俺が来た時には、クラス中の生徒が隆弘を見ていた…

『蒼太！隆弘止めてよ！』

静の慌てぶり…普通じゃない！

『隆弘、いいから…』

『良かねえだろが！かなりムカつくぜ！三橋出てこい！』

このままでは取り返しつかない事になる…

俺は隆弘の腕を掴み…

『隆弘！行くぞ…』

俺は静に呟いた。

隆弘と気持ちは同じだった。ただ…こんな事しても、何も解決はしない…

隆弘は俺の気持ちを察したのか、ため息を吐き落ち着きを取り戻した。

『三橋って…どれ？』

睨む様に一人一人見る隆弘。

『お前に用があんだよ！必ず探し出すからな！』

隆弘は、そう言い残し教室を出て行った。

教室に戻ると、さっきまで騒がしかった教室が静まり返っていた。

隆弘は席に着き、外を眺めていた。

俺も隆弘の横に立ち…

『隆弘…ごめんな？』

俺の為に敢えて悪者になった隆弘。そんな隆弘に謝るしかなかった…

『三橋って奴、ゆるさねえから！』

『……隆弘？もういいって。ホントいいから…』

『……蒼太はそれでいいんか？』

『……。』

『後悔するぞ』

隆弘の行動…とても良い事とは思えない。でも、仲間を思う気持ちからくる怒り。

俺は、ヤバいって思ったけど嬉しくも思えた。

ただ、
気になったのはさっき教室にはコマキの姿は……なかった。

朝の出来事…

気にしない様になっていた。あまり大事にはしなくなかった…

午前の授業が終わり、俺はいつも通り屋上に向かう…

廊下を一人歩いていると、知らない男が見ていた。

俺は知らないフリをし、男の横を素通りした。

階段を上がり、屋上のフロアに座りこみ壁に寄っかかりながら外を眺めた…

ただ、話してただけ……だよな…

独り言を呟いていた…

コッ…コッ…

階段を歩く足音。

ん？誰か上がってくる…

俺は階段をボ…っと見つめ、誰が来るのか待っていた。

『お、いたいた！』

来たのは隆弘だった。

『あれ、静は？』

『知らね！』

朝の件で隆弘も喧嘩したのかな…

特に会話もなく、少し沈黙が続いた…

頭の中では沢山喋っていた……言葉にならない…

その沈黙を破ったのは隆弘だった…

『蒼太さあ。』

隆弘の声は心なしか暗かった…

『ん？』

『二人だから…本音で話すけど。』

『……何だよ改まって。』

声に覇気が感じられない…朝の事、気にしてんのか？

『蒼太…コマキ、どう思ってたんの？』

隆弘の表情は真剣だった。ふざけてる様子もなく、自分の事のように悩んでる…

『朝の事か？』

『ああ……』

俺の中でも三橋って奴は少し気になっていた。顔も知らない、性格もわからない…確かに不安な気持ちは募る一方…

『…………好きだよ。』

隆弘は思わず『えっ！』って…。目が点になっていた。

自分でも驚いていた。好意があるという事は隆弘も知っていた。でも、自分の口から好きという言葉が出るとは思ってもみなかった。

『好きだけど…、選ぶのはやっぱりコマキなんだよな…。』

『だってよ！』

『正直…まだ告ってねえんよ…。』

隆弘は何も言わず、ただただ耳を傾けていた…

『俺達は付き合っていない…。誰と話そうが何をしようが俺が止める…そんな権利は……ない。ただ……』

『……ただ？』

『いや……。』

俺はクリスマスに告白しようと思っていた。特別な日、最高のプレゼントを持ってコマキに告白しよう……

隆弘にはなんか言えなかった。恥ずかしくて…

『ただ…選ぶのはコマキだから。』

結局、コマキと静は俺達のいる屋上には来なかった…

俺達はチャイムと同時に階段を下り、教室へと…

途中、B組の前を横切る。少し通りづらいな…

隆弘はお構いなしに歩いていった。

そんな時…一人の男が窓からコツチを見ていた。

あれ…さっきの奴…また見てる…

180ない位の背丈の男。短髪で爽やかなタイプ。如何にもスポツやってます！って顔してるよ！

まあ、相手してもね…

隆弘も全く気にも止めない感じで前を素通り……止まった！

『お前よお、あんまなめんなよ？俺…敵に廻したら怖いよ？』

隆弘は前を見たままスポ・ツマンに聞こえる様に呟いた。そして教室に入っていた。

後ろから見ていた俺は、隆弘とスポ・ツマンの異様な空気をビシビシと感じる…

そして、ビビるかと思えば笑みを浮かべていた…

下校時間になり…

結局、コマキと会う事はなかった。

今日は久々に隣の街に繰り出す事にした。

何故って？正直言つと、コマキと静に逢ってしまつと気まずいから…

電車で五分。改札を抜け、フラフラと歩きながら話していた。

『なあ、静は？』

『ん？喧嘩！いつもの事だから。』

隆弘は俺に微笑みながら話始めた…

『俺達はしょっちゅう喧嘩してるし、こんな事はマジしょっちゅうなんよ！ただ、今回は俺がやりすぎたって…。俺が謝るまで口利かないってよ！』

『はあ…。』

『静にもコマキの事は言っただけ！』

『……謝らないん？』

『はあ？男がんな簡単に頭下げて…バカだなあ！』

『バカじゃねえし！』

『蒼太は絶対に尻に敷かれるタイプだな！』

『うるせえ！』

『っていつかさあ、ここ…何処？』

『……さあ！』

いつも通ってる街とは違い、久々に来たってのもあり少し迷子気味の俺達…

来た道に戻ってみたり、冒険してみたり……ドツボにハマったらしい…

気づくと空は真っ暗に…。歩き疲れ、俺も隆弘も足が棒に…

そんな中、同じ学校の制服を着た人を発見！

『蒼太、うちの奴等じゃん？女もいる！行こうぜ？』

『…女はいらねえけど…早く帰りてえ…』

ショップの前で商品を見ているらしい。俺達は疲れた体に鞭を打つように歩いた。

いくら歩いてもたどり着かない……。まるで砂漠を歩いてる心境…

徐々に距離が縮んでいく……！

『何だよ、男連れかよ！それも、随分とでけえなあ！』

隆弘は残念そうな表情を浮かべながら歩く。

『……おい、蒼太！あれ……』

隆弘は思わず生唾を飲んだ。

俺もすぐに気付いた！その制服を着た人達は、コマキと三橋だと…

『やっぱりアイツが三橋だった！』

隆弘の歩くスピードが徐々に加速していく！今にも殴り掛かりそうな勢いだ！

逆に俺はどんどん失速していった…

『隆弘？……もういいや……』

『え?』

隆弘は驚いた表情で俺を見つめた。

所詮、噂話……

心の何処かで信じてなかったんだろう……

コマキがそんな事……

実際に自分の目で見てしまうと……諦めも付くかな……

俺はコマキを目の前にし立ち止まった。そして何も言わず引き返した。

こうしてコマキとの距離が徐々に遠ざかっていった……

帰りの電車。

隆弘は俺の横に座り、窓の外を眺めていた。

ピピピッピピピッ…

三三七拍子かよ…

隆弘は徐に携帯を取り出した。

『ん？』

やる気の無さそうな返事。俺は黙って隆弘の会話を聞いていた。

『だってしょんないっしょ？』

何がしょうがないのかわからない。

でも表情を見てれば相手が誰なのか…検討はつく。

最初はムスツとしていた隆弘。話してる内に笑顔に……

幸せそうだなによりです…

あれ…話終わった。顔が緩んでるぞ！

話が終わったと同時に地元の駅に着いた。俺達は荷物を担ぎ降りる事に……

『な！言っただろ？』

電車を出た瞬間ハシヤギ出す隆弘。
歩きながら話す事に…

『はあ？意味わかんねえよ！』

『女に簡単に頭下げんなって事！』

ああ…

その割には随分な喜びようで！

改札を抜け、歩き慣れた道を歩く…

『仲直りしたん？』

『だってしょうがねえだろ？泣いて謝るんだから！』

おいおい…明日言つといてやるから…

『そ、そっか…良かったな！』

俺が原因で喧嘩になった二人。喧嘩はよくするって言っても、あまり気持ちの良いものではなかった。仲が戻って良かった。

何故か隆弘の足取りがヤケに軽い…

『蒼太…わりい、これから仲直りデートして来るわ！帰り気い付けてな！』

『おい！』

『あ！蒼太に言いたい事があつたんだ！』

『ん？』

さっきまでヘラヘラしていた隆弘…。急に真剣な表情に！

『お前、最近すっげえ腑抜けだよな！いい加減にしとけよ？昔のお前に早く戻れや！』

隆弘は話が終わると同時に拳を振りかざし……

ゴッ…

隆弘の拳は俺の右頬に命中！

転びはしないまでも踏ん張るので精一杯…

んの野郎……な！

『じゃなあ！蒼太なら余裕だぞ！』

と捨て台詞を吐き、俺に指を差しながら笑い、逃げる様に走り去った…

あの野郎…痛っ…

久々に隆弘の拳をくらったな。アイツのパンチが一番効くぜ！憎し

みとか悪意とか、そんなんじゃない。暖かな…心のこもった拳。隆
弘なりの愛情表現だ。でも、もうちょっとスマ・トに行こうぜ…

お陰で目が覚めたよ…。

通行人が見てる中での隆弘の一発…

周りがざわめく中、隆弘は走り去った。俺の口からは血が滲み、手の甲で拭う…

手に付いた血を見て…
熱くなる…

さあ…行こうか！

俺は内心かなり燃えていた…。隆弘とは反対方向へ走り出した…

向かうのは…隣街。そして、コマキに…

駅に着き、改札をくぐり抜け電車に乗り込んだ…

気持ちが先走る…

もう……迷いはない！

駅に着き、携帯の時計を見る… 8：45

あれから一時間近くたってるな…

少し慌てながらも冷静に判断。メインの通りを走りながら探す…

いない……

飯でも食ってんのか？

一軒一軒くまなく探す。

マジいねえよ！

12月後半にもなるのに体中に汗をかいていた。口からは白い息…

上着を片手に持ち、ひたすら走りコマキを探した…

ハアハア…ンハア…

迷いながらも街中を走った…。制服を見ては声を掛け…。出来る限

りの事はした。

クソッ…何処にいんだよ！何で見つかんねえ！

『何処にいんだよ！』

苛立ちと自分の無力さに腹が立ち、辺り構わず怒鳴り散らした！

そして、走り出す…

コマキ、何処行った！頼む出て来てくれ……

俺の願いも虚しくコマキを見つけ出す事は出来なかった。

終電間近の時間…

俺は渋々電車に乗り込んだ。脱力感…。体が異様な程に重い。

終電の車内は寂しい程に人気がなく…とても寒く感じた…

汗をかいたせいか体が冷えきっていた…

人気が徐々に減る。そんな中、俺は地元の駅を後にした…

ブーブー…携帯のバイブ。携帯をポケットから取り出し開く…

あれ…隆弘だ！

どうしたんだ？……疲れたし、殴ったし…。今は出る気分じゃねえ…

何か頭がボーンとするな…

ずっと鳴りっぱなしの携帯…

バッグの奥の方にしまい、その後出ることはなかった…

家に着き、玄関を開けようとドアノブに手を添えた……

隙間に紙が挟まっていた……手紙？

何だ？

気にはなつたが、後で読もう。手紙を左手に持ち扉を開いた。
朦朧もうろうとしながら玄関を閉め家の中に……

ドサッ……

リビングでTVを見ていた遙。玄関の方から物音がすると、気にな
り……

遙は俺を見て凍りついた！

『ちょ……蒼太？お母さん！』

玄関で俺は倒れていた……

あれ……動かねえ……

隆弘の電話、この手紙……。何だったんだろう……。後回しにしながら……良かった……

そう思いながら意識は薄れていった……

イブまで……。あと3日……

……冷たい

額に何か冷たさを感じた…

気持ちいいな…

俺は意識が朦朧とする中、ゆっくりと目を開けた…

視界がぼやける…

誰か俺の額に手を乗せてる……コマキ？

『蒼太…』

そんな訳ないか…俺ん家、来たことないし知るわけもない…

俺は再び目を閉じた。そして、深い闇へと…導かれて行く。

……今の声

お？また変な人だ！何で金髪になってんだよ！

それに今日は俺一人かよ！

いつも沢山の人に囲まれていた。何故か今日は俺一人…

『もうすぐアナタはいない人！願いが叶う意味を知る。』

いない人って意味がわからねえよ！

『おい！何なんだよ！マジ願い叶うって事なのか？いない人ってなんだよ！』

夢にしか出てこない人物。俺を見つめながら何も話さない…

『何とか言えって！この夢って……あゝム力つくなあ！おめえぶっ飛ばすぞ？』

『私はアナタとしか会う事が出来ないのです。そう、アナタは私なのです。』

はあ？俺がお前？

……はあ？

『んじゃとりあえず顔、ちゃんと見せろよ！』

『アナタが私の姿を見る時は、アナタが消える時です。』

ええ！

んじゃ見なくていいや…

今日は結構喋れるな…。何話して良いかわからねえ…

俺は、何処の空間かもわからない場所に座り込み、ジッと見つめていた。

『俺……どうなっちゃうの？』

……あれ？

目を開けると何故か闇。まだ……夢？俺……死んだ？

夢と現実の区別がつかない……

まだ、多少のだるさは残っていた。

俺はベッドから起き上がり、闇の中を歩き始めた……

ガッ！

痛っ！くうう…

テーブルの角に小指をぶつけうずくまる俺…

痛みを感じる…俺…生きてるじゃん！

壁を頼りに電気スイッチを探し、電気を付けた…

明かりが部屋を照らす。

いつもと変わらない部屋…

時計を見ると4：20…

ベッドに座り、ため息をついた。

いない人……。もうすぐ俺は消えるって事か？

ん？夢の人が言っただけで事は誰かがそういう願いを書いた……って
事が！だとしたらまだ、諦めるには早すぎる！

良かった…

コマキの事、家族、仲間……そして、自分自身…

生きてるなら諦める必要はない！今、出来ることから始めよう！そ
う誓い、部屋を出た…

まずは…腹ごしらえ…

『遙！腹減った！』

この時は、まだ気付いていなかった。隆弘からの電話とあの手紙の
重大さに…

そして…夢の人の言葉の意味…

イブまで……後2日

いない人…

俺は消えるって事なのか？

結局、何もわからず朝を迎えた。

携帯を見ると無数の履歴とメール…

学校で話せばいいか…

微熱はあるが、俺には時間がない！早く会わないと…

『おはよ！』

『ああ！蒼太！大丈夫なん？』

急いで駆け寄り、心配そうに俺を見つめてきたのは綾だった。

『ああ…まだちょっと熱あるけど…』

綾はすぐに俺の額に手の平を当てた…

冷たくて気持ちいい…

……昨日来たの、綾か？

ふと昨日の事を思い出した。目がぼやけてて分からなかった相手…。感覚的に今と良く似た感じがしていた…

『ちよつ、微熱じゃないし！蒼太、帰った方がいい！』

『……大丈夫だよ！』

『大丈夫じゃないよお…』

『大丈夫だから。それより昨日、俺ん家来た？』

『え？行つてないよ？え！誰かい…』

綾じゃない…かあ…

綾の頭をポンと叩き、自分の席に着いた。俺の事を心配してくれるのは凄く嬉しい。でも、俺には時間がないんだ…。ごめんな…

席に着くと同時に隆弘が前の椅子に座り…

『よう、大丈夫かよ!』

『おう!悪かったな…電話出れなくて。』

『いいよそれは。後で話あるんだけど…マジ大丈夫か?顔色悪いぞ?』

そんなに悪いんかなあ…。俺自身麻痺してるのか?でも、そんな事言ってられないんだ…

こんな時って、時間が凄く長く感じるんだよな…

どうにか午前の授業を終わらせ、いつもの屋上に行こうと廊下を歩いていた。

ダルい…

『椎名！』

ん、誰だ？後ろを振り向こうとした……その時！

意識が遠のく……。足がもつれ、そのまま倒れ込んでしまった！

俺の後に付いてきた隆弘…。

『蒼太！どうした？三橋、てめえ何したんだよ！』

『……なんも…』

あれ？隆弘……。意識はあるんだけど……。体が言うこときかない…

『蒼太！…蒼太！』

隆弘は俺を抱きかかえながら何度も叫ぶ様に呼んだ。その声に気付いたのか、すぐに飛び出してきたのが静。

『どう…え！隆弘？蒼太どうしたの？』

動揺を隠せない静。手を口にあてたまま動く事が出来なかった。

『隆弘……』

『何だよ！』

『誰か…マジナイ…で、俺を…埋めようと……してる…』

『マジかよ！』

『その紙……を…』

手が震え、呂律が廻らなく…

『蒼太、え？』

後ろにいたのはコマキ。驚きのあまり言葉を無くす…

コマキはすぐに俺の横に座り、俺の事を見つめていた。そして、ソツと額に手をあてる…

『下がってないじゃん！何してんの！』

いきなり真面目な顔をし、怒り出すコマキ。

ああ…やっぱりコマキ、来てくれたんだね…

『おい、んな事より保健室…連れてくぞ！』

周りに野次馬が集まる中、俺は隆弘に担がれ、保健室へ運ばれた。

保健室のベッドに寝かされ、逃げ出さない様にとコマキを側に。そして、何も言わず隆弘は急いで保健室から出て行った。

俺の横にはコマキ。久々に見るコマキは新鮮な感じがした。

『蒼太？何で無理したの？』

二人になって気が緩んだのか目に涙を溜めながら話し始めるコマキ…

『そつか…喋れないかあ……蒼太？昨日……』

……昨日？

『私、ずっと寂しかったんだよ？蒼太に逢いたくて逢いたくて、毎日泣いた。……でもね？』

我慢していた涙が溢れ出す……。何があっただよ……。そんなに苦しかったなら、俺に話してくれれば…

『ごめん……。』

涙を拭い、再び話し始めた…

『隆弘から蒼太の家聞いて行つたの。そうしたら遙さんいて。帰ったら電話貰える様伝えて下さいって…。蒼太、TELしてもメールしても返ってこないから……。グスッ…嫌われちゃったかなって…』

俯き、でも頑張つて話そうとするコマキ。俺はまた泣かせてしまつたんだな…

『でもね？…グスッ…でも、蒼太…私の事探してくれてたって聞いて…蒼太、早く…元気になってよぉ！』

ハンカチじゃ追いつかない位の涙を零すコマキ。今まで俺は何をし
てきたんだ…

『ごめんな……』

『え？……蒼太！』

本当に小さな声しか出せなかった。でも、コマキの心には届いた様
だ…

そして、コマキはバッグのポケットから何かを取り出し、俺に見せ
てきた。

コマキが徐に出した物は、グシャグシャに丸められた水色の紙だっ
た。

『……これ、蒼太が病んだ原因かも…』

コマキは丸まった紙を少しづつ広げ、俺に見せた…

まさしくマジナイハートだった。そして、センターに書かれた願いは…

椎名蒼太がいなくなればいい！

正直……震えがきた…

『コマキ…それ…破って……くれ…』

『うん！』

コマキは今までの鬱憤を晴らすかの様に破り捨てた。

『蒼太？これで元気にな……蒼太？』

俺の意識は…

このまま俺……死んじゃうのかなあ……

『蒼太？……蒼太！』

窓の外から照らされる日差し。白い布団とシートが光を反射する様に輝いていた。

まるで天使が現れそうな風景を思わせる…

『蒼太？…嫌だよ！』

ずっと泣いていたコマキ。反応しない俺に抱き付き、さらに号泣した……

ぐう…ぐう…

コマキは『あれ？』と、俺の顔をマジマジと見た。

……寝てる？

『…寝てんの？はあ？』

呆氣にとられたコマキ。キョトンとしながら数秒の時がたち、寝てる俺にデコピン、そして頬をつねった。安心したのか、瞳を潤わせ
呟いた…

『もう、心配させてえ！』

怒ったフリをするコマキ。そして…そっと口にキスをした…

俺が気付いた時には下校の時間だった。目が覚めると目の前にはコ

マキ。後ろには隆弘と静。何かもめていた。そんな2人をヤス達が止めに入っていた。

『また喧嘩かよ！』

俺は上半身を起こしながらニコツと笑みを零し、突っ込みを入れた。

『あ！蒼太起きたあ！』

すぐに気付いたのはコマキだった。嬉しそうに大声を出し、周りの目も気にせず抱き付いてきた。

自然に……不思議なくらい自然にコマキを抱き締める俺……。

強く……強く……

あれ？俺……喋れるし動ける……

さっきまで喧嘩していた隆弘も静も、俺達の幸せそうな光景を目の当たりにし、ただ見つめるばかり……

そして、ため息を吐き…

『いつまでやってんだ！』と、少し照れた様な表情をする隆弘。

俺は思う…

生きてて良かった…
皆がいてくれて良かった…

そう思いながら温もりを感じ続けた。

今回の件でマジナイの威力をまざまざと感じさせられた。本当に凄
いんだな…。もう少し遅かったら…。ここにはいなかったのかもしれない…

俺はいない人…

残念だったな！俺はいない人じゃなくて、いなきやいけない人にな

るんだ！コイツ等と、ずっと一緒に…。

色々聞きたい事は山ほどあった。でも、皆の喜ぶ顔を見たら、モヤモヤもどっかに吹っ飛んでしまった！

これからよろしくな！

でも……

隆弘…この間の一発は忘れねえからな！

イブまで……明日！

第六章 1 聖夜の涙

ん……ふぁ……

俺はアクビをしながら目をこすり、カーテンを開けた。今日も晴天なり！

今日は今までにないくらい目覚めが良かった。

誰もが胸ふくらませ、甘い恋の予感を期待させる日……

そう、クリスマス……イブ……

学校も冬の休みに入り、羽を伸ばす時が来た！

24日を祭日にした人……マジ偉い！ありがとう！

そんな事を思いながら出掛ける準備を始めた。

朝からコマキと待ち合わせの約束。今日だけは待たせてはいけない！俺が先に行って待ってなきゃダメなんだ！

鏡の前に立ち、自分の顔を見つめる…

今日…決める！

朝シャンし、歯を磨き、スタイリング。たまに、笑顔の練習をし、何故か筋肉を動かす。ピアスを付け爽やか系の香水をさり気なく！

『蒼太…何してんの？パンツ一丁で…』

俺の行動を一部始終見ていた遥。俺は思わず赤面…

『うるせえな！見んなよ！』

『コマキちゃんでしょう？』

全てお見通し！と言わんばかりにニヤけ、そのままりビングの方へ歩いていった。

俺は気を取り直し再び鏡を見つめた。

サブっ！

裸でいたお陰で肌が冷たく…

何を思ったのかいきなり屈伸をし始めた俺…

そして、思いも寄らぬ出来事が俺を襲った……

バツ！

しゃがんだ瞬間に鋭く、少し切ない様な音…

俺はお尻に冷気を感じた。

やべえ！

俺はすぐに立ち上がった。リビングの方が少し気になる。遙……絶
対にいないでくれ！

恐る恐る見ると、隠れる様に見つめる遙が、そこにいた！

何でそこにいるんだよ……

涙をこらえ、自分の部屋へ戻る事に…

新しいパンツをはき、細めのダークデニムと白黒ボダーのモコモ
コセーター。かるくシルバークセを身に付け、羽織る上着を腰に
巻いた。

準備は整った！

時間が少し気になる…。小走りで階段を下り、玄関でスニ－カ－の紐を結んでいた…

『クリスマスデ－トいいなあ！』

遥の声がリビングから聞こえてきた…。なんだか不気味な程明るい声…

『遥は？』

朝からパジャマのままの遥。クリスマスにこれじゃ……。。

『いないもーん！あ、蒼太！パンツ破るなよぉ！あと詰めが甘そうだからシツカリねえ！』

な！言いたい事言いやがって…

俺は急いで靴を履き……………

『クリスマス一人で寂しいな！サンタ泣いてるぞ？じゃーな遥！』

と捨て台詞をはき急いで玄関を飛び出した！

さあ、デートだ！

朝の事は忘れて、思いっきり楽しむぞ！

いつもの駅に10時。俺はコマキにそう告げた！

絶対に来てない！

こんな早くに来る訳がない！

そんな事を思い、一人勝ち誇っていた。

鼻歌まじりで…心なしかリズムカル。軽い足取りで駅に向かった。

9：30…絶対に来てない！

コマキより早く行って『わっ！』って脅かすんだ！

いつも待たせたり、ギリギリだったり。自分でもわかっていた。これじゃダメなんだと…

今日から俺は変わります！

空に手をかざし、太陽を掴む様に拳を握り締めた。思いつきり空気を吸い込み…

おし！

そして、再びリズム良く歩き始めた。

コマキ…どんな服装で来るのかなあ…

やべえ…顔が緩む…

そうこうしている内に、駅が見えてきた。

あれ？

駅の改札口付近で小さな子供らしき人が立っていた…

コマキ？…30分前だぞ？ありえないよ…。近づくにつれ、女性である事は確かだ！

歩きながら目を細め、女性を見つめる。

……………コマキ！

コマキは30分前から待っていた。改札口前で待っていた。時に腕時計を見たり、ブリキの兵隊みたいに足の関節を曲げずに歩いてみたり…

そして、俺に気付くと大きく手を振り手招き…

『そ〜た〜！』

コマキ……早すぎるよ。俺の計画が…

まあ、それはさておき……

『よっ！すつげえ早くない？』

『何か、いてもたってもいらなくなっちゃって……って、蒼太がこんな早いなんて……雨降るかも。』と笑顔のコマキ。

俺は『ちえっ！』と笑い、コマキの頭を撫でた。

可愛い笑顔のコマキ。いつも制服姿ばかり見ていた俺は久々のデートってのもあり、なんだか新鮮な気持ちでいた。

『蒼太、どう？』

『……え？』

『え？じゃないでしょ？』と俺の前で両手を広げ、クルッと廻って見せた。

白いタートルネックのセーターにベージュとホワイトの長めのマフラ。白と黒のチェック柄スカートに黒いロングブーツ。少し甘い

香りを漂わせながら笑顔で見つめるコマキ…

凄く可愛い……

『…………。』

今日はキメるって決めただろ！蒼太！

『…………可愛いな！』

俺はさり気なく眩き、周りを見回した。

『え？なに？』

本当に聞こえてなかった表情をするコマキ。

『え？…………行くぞ！』

『なあに？今、何て言ったの？そおたあ！』

甘えた声を出すコマキ。そして、俺の腕をほぼ強引に組み、引っ張る様に改札口をくぐった…

嬉しそうに、まるで子供の様に喜ぶコマキ。そんなコマキを見ていて幸せな気持ちでいっぱいになった。

今日は俺がリードするんだ！

コマキの勢いに負けず、逆に引っ張る様に電車に乗り込んだ。

今までにないぐらいの積極性。強引な俺に笑顔で付いてくるコマキが愛おしく思えた…

いつもより人気のない電車。窓の外を見ると、沢山の車が列をつくって並んでいた…

休みの日の電車って空いてるんだな…

コマキと四人用のボックス席に二人で座り、くだらない話をしながらそんな事を考えていた。

途中、売店でお菓子とジュースを買い、違う電車に乗り換えた。

『ねえ、蒼太？』

『ん？』

『……何でもない。』

コマキには何処に行くのかは伝えていなかった。多分、少し不安なのかな…

コマキの驚く顔が見たくて、最高のサプライズを準備していた。

外の景色は地元の景色から都会へ。都会から自然が豊富な景色へと

変わっていった。

『やっと着いたあ！』

俺は電車を降り、両手を上げ背伸びした。

『え？ここは何処？』

少し動揺するコマキ。

『ん？俺の親父の故郷なんよ！』

『え？……まだ早くない？』

『はい？何意味わかんねえ事言ってるんだよ！』

コマキが驚くのも分かる気がする。山の中にポツンと建つ無人駅。こんな所に駅があるの？って思わせるくらい静かな所にあった。線路沿いにはフェンスもなく、今にも動物が出てきそうな雰囲気。ホントの田舎って感じ。子供の頃、親父と良く来たな。今も昔も変わらなかった。

俺は無人の改札を抜け、駅の外に出た。

『え！蒼太、切符は？』

『ああ、その箱に入れときゃいいんよ！』

戸惑いながらも改札をくぐるコマキ。そして駅の外に出ると…

『わあゝ！凄いいえ、なにもない！』

『でしょ？でも好きな場所なんだ！』

地元も田舎だけど、ここはもつと田舎だ！まず、家が少ない！車もたまに軽トラが走ってるくらいでほとんど見かける事はない！

『蒼太？何処行くの？迷子とかないよね…』

不安そうに問い掛けるコマキ。

『大丈夫だよ！俺の地元みたいなもんだから！ほら、あそこだよ！』

俺は笑顔で指差した。

『え！』

コマキは又しても驚いた顔をした。俺が指差した先に見える物は、大きな建物だった。山の上に建つ大きな旅館。

『親父の兄貴が経営してる旅館だよ！すげえっしょ！』

『めっちゃ凄くない？っていうか……泊まるん？』

またしても驚いた顔を……。

『はあ？コマキ、泊まりたい？泊まるんなら泊まれるけど。』

『泊まる泊まる言わないでよ！』

『あははっ！何、照れてんだよ！可愛いですねえ！』とちゃかし、急いで逃げる様に走った。

『もお！蒼太のバカ！』

顔を真っ赤にし、俺を追い掛けるコマキ。結局捕まり、荷物を持たされた…

田舎道を二人で歩いていると、畑の畦道で休憩しているお婆ちゃんが俺達を見つめていた。

『こんにちは。』

コマキはニコニコとお婆ちゃんに話し掛けた。

『こんにちは。』

お婆ちゃんも優しいような笑顔で挨拶。

挨拶されたのが嬉しかったのか、お婆ちゃんの横にしゃがみ込みお喋りし始めた…

『大変ですねえ。』

『いつもしてるから平気だよ。テレビに出てる人かい？』

コマキは目をまん丸にし、俺に振り返った。そして…

『ち、違いますよお！遊びに来ました。』

『そうかい、べっぴんさんだったもんで。何もない所だけどゆっくりしてってね。』

『はい！お婆ちゃんもお体気を付けて下さいね。』

コマキはお婆ちゃんに手を振り、笑みを浮かべながら帰ってきた。

『お婆ちゃん好きい。』

幸せそうなコマキ。

『コマキ…お婆ちゃん子なんだな！』

『うん！』

相当嬉しかったのか、会うお爺ちゃんお婆ちゃんに声を掛けるコマキ。その度に上機嫌になっていた。

意外な一面を見せたコマキ。今まで一緒にいて初めて知ったコマキの素顔。連れてきて本当に良かった。心底思いながら先に進んだ。

12月後半なのに、ヤケに暖かく感じた。

天候に恵まれたお陰で日差しが気持ち良く、俺達を包み込んでくれていた。

日頃の行い……かな？

周りを見渡せば木や畑。紅葉も終え、枯れ葉は風に流され飛んで行く……。少し切ないな……

ガサガサ…ガサガサ…

コマキは枯れ葉の乾いた音を聞きながら楽しそうに歩いていた…

『なんか、こつこつのいいね！』

いきなり立ち止まり、山を見つめるコマキ。

『……そうだね。』

周りに便利なお店や自販機。少し歩けば何でも揃う。そんな環境で育ったコマキは、この大自然の開放感を目で、耳で、鼻で感じていた。

『私、旅行とか行つた事……ないんだあ……』

『え！…そうなん？』

初耳だった。親は共働きつてのは知ってたけど…

『蒼太？』

『ん？』

『私、泊まってもいいかなあ。』

『ああ、良いよ………ええ？良かねえだろ！』

いきなりの爆弾発言！清々しい顔しやがって……可愛いじゃねえか…

『なんか……帰りたくなっちゃった…』

畑で働くお婆ちゃんを見ながら、少し寂しそうに呟くコマキ…

そんな寂しげな顔をするコマキに、俺は何も言ってあげなかった。

『なあゝんてね！』

ニコニコと微笑むコマキ……。顔では笑ってても、心に嘘は付けない
もんだよ…

……コマキ

『無理すんな！俺の前では素直になれよ…な？』

『じゃ、今日ぐらい……一緒にいてよ！』

……え！

ふざけた様子もなく、ジッと俺を見つめていた…

え？

これはどういう事だ？

コマキは何を求めてる？

俺は、見つめられたまま動く事が出来なかった…

『あははっ！蒼太、すうぐマジになるんだもん！可愛い。』

笑いながら俺の頬を突つつき…

『んじゃ行こ？』

笑いながら明るく振る舞い歩き始めた…

何故かな…

コマキの背中が泣いている様に見えるのは……

今はソッとしておっつ…

あれ？

さっきまで晴れていた空…遠くの空に怪しい雲影が迫っていた…

何もないやいいんだけど…

昼間はあんなに天気が良かったのに、旅館に着く頃には雲が空を覆っていた…

『何か寒くなつたな…』

『寒いよお…』

辺りを見渡すと、風に靡いた木や草が不気味なくらい揺れていた。

何か怖いな…

そんな事を思いながら旅館へと急いだ。

旅館の中に入ると、仲居さんが五人、お出迎え。辺りを見渡すと幾つもの掛け軸。そしてフカフカなベージュのカペット。旅館独特の匂い。硫黄の匂い……懐かしくもある匂いだ。コマキを客待ちの椅子に座らせ、受付に向かった。

古い仲居さんや女将さんは知っているが見当たらない。とりあえず叔父を呼ぶ事に…

『すみません。義夫さんいらっしゃいますか？』

受付嬢らしき女性は俺を見つめ、受話器に手を伸ばした…

『失礼ですが、どういったご用件でしょうか？』

疑った様な目で見る女性。確かに学生の身分でこんな高級旅館に二人……ありえないよな…

『え？どういったって……』

顔付きが徐々に強ばる女性。そんな時、受付の奥から声が…

『蒼ちゃん！』

奥から出て来た人は、俺が幼い頃からいる受付指導者の美希さん。昔、親父と来た時、色々とお世話になった人だ。

『あ……お久しぶりです。』

『本当に久しぶりね。何年ぶりかしらね。ちょっと待ってて?』

美希さんはすぐに受話器を取り、叔父を呼んでくれた。

『蒼ちゃん、大きくなったわね!今、社長来ますから、ちょっと待っててね?』

『すみません。』

美希さんとのやり取りを見ていた女性、驚きの表情を浮かべ、後に美希さんに奥へと連れて行かされた…

俺はコマキのいる客待ちへ戻り、叔父を待つ事にした。

『蒼太!ここ、めっちゃ凄くない?』

異常な程、興奮するコマキ。確かに、この旅館は県で一、二を争う高級旅館。凄くない訳がない!

足を組み、心なしか大物になった気分…

『蒼太、久しぶりだな!』

後ろから低い声で話しかけてくる声…。前に座るコマキ。何故か少し緊張している様にも見えた。とっさに振り向くと、笑顔で立っている叔父がそこにいた。

俺はすぐに立ち上がり…

『叔父さん!ご無沙汰してます!』

『こんにちわ…』

コマキも俺につられ立ち上がり挨拶をした。

『いいから!座りなさい!』

多少の緊張はあった。コマキ程ではないけど…。

『それにしても可愛いお嬢さんだな!蒼太の彼女か?』

このエロ爺！

『はい！』

間髪入れずに返事をしたのは……やっぱりコマキ。

俺も叔父も目が点になっていた。

『そうか、んじゃ結婚したら家に来なさい！あはははっ！』

豪快に笑う叔父。コマキの事が気に入った様だ……。そんな叔父を見て、ヤケに嬉しそうなコマキ。お前等は似た者同士か……。

『それで…またか？』

意地悪そうな顔をする叔父。

『いつもすみません！』

と、手を合わせた…

『…まっ、ゆっくりして行きなさい！家の風呂は広いぞ！』

何故かコマキに風呂自慢をする叔父。その後、少し親父ネタを言つて仕事に戻っていった。

『蒼太、叔父さん良い人だねえ。顔怖いけど！』

緊張が解れたのか、いつものコマキに戻っていた。

『ただのエロ爺だよ！でも、優しいよ。』

親父が亡くなって、俺の事を一番最初に心配してくれたのが叔父さんだった。

何かあったらいつでも来いよ…

叔父さんの子供になれ…

旅館継げ…

親父の前で会う度に言われていた。顔が怖くても、周りが何て言っても、俺は叔父さんが好きなんだ。

気付くと窓の外は薄暗くなっていた。俺達はとりあえず鍵を美希さんから受け取り、部屋に向かった。

帰りたくない…

昼間コマキが言っていた事を思い出す。このエレベーターの中で…

いつも一緒にいるのに、何故か緊張していた。コマキも俯いたまま話す様子はまるでなかった。密室って、誰もがそうなのかな……。そんな事を思いながら最上階へと上がった。

『コマキ？この部屋ってかなり凄いで！』

『……うん』

『どうした？』

『…ん？何でもない…』

何か元気ないな…

まあ、とりあえず部屋に入るか。

最上階に着くとすぐの所にある部屋。慣れた手つきで鍵を開け、部屋の中に入った。

真っ暗だ…

電気もついてない。

カーテンも閉めたまま。

ありゃ…もしかして、掃除とかは自分でやれって事？

暗くては何も出来ないと、玄関のスイッチに手を伸ばした…

廊下の灯りが頼りだった。その灯りが徐々に暗闇へと…

『ちよっ…コマキ今閉めたら！』

スー…カチャ！

ドアが閉まると同時に後ろから抱き付くコマキ。

『電気……つけないで…蒼太』

小さな声で囁き、静かに…強く抱き締めるコマキ。

俺は動く事が出来なかった。逆に今、動いたら…

頭の中で色々な事が掛け巡っていた。コマキの鼓動。俺は指だけ金縛り。真っ暗な部屋。視力が奪われた時の聴力ってかすかな音も聞き分けらるんだな。今、外は雨が降っている…。そんな事まで分かってしまった。

『このまま…ずっとこうしていたい…』

コマキ…

俺の背中に顔をうずめたまま離れようとしなかった。

徐々に暗闇に目が慣れてきた頃、俺は囁く様に言った…

『コマキ？大丈夫だよ。』

『……ダメ』

俺は優しくコマキの手に触れ…

『壁はもう飽きた…。コマキの顔が…見たいな…』

と嘔き、コマキが油断した隙にゆっくりと体を反転させ、壁に寄りかかった。

『な？大丈夫だろ？』

『……うん』

『電気つけても…いい？』

『ダメ！』

まるで子供のワガママだった。何を求めているのか…サッパリだ！

『……何したら許してくれる？？』

子供に優しく話すお兄さんの様だと自分で思ってしまった…

『……キス』

パチ！

『ああ！つけたあ！』

コマキは急いで顔を隠し、しゃがみ込んでしまった。

キスと言われて、思わず背中に力が入ってしまった。ちょうどそこにスイッチが……

『ごめん！つてどした？』

『何か…涙出てきちゃって…鼻水も……』

コマキは急いで洗面所に駆け込んだ！

俺も恐る恐る背中を触ってみた……

マジ！

俺のお気に入りのセーター……。涙と鼻水でぐちょぐちょだよ……。でも、何で泣いてたんだろ……

俺はセーターを脱ぎ、上半身裸のままリビングへと向かった……

わぁ！

俺が目にしたのは、クリスマス色に染められたリビング。

真っ白い壁に赤いリボン柄の太いラインが天井で交差していた。まるでサンタからのプレゼント……みたいな。

部屋の隅っこには天井ギリギリのツリー。コンセントに差し込めば……白と青のランプが点灯した。窓にも赤と白のチェック柄のカーテン。正にクリスマスの為の部屋だ。

だから部屋が真っ暗だったのか……

部屋中にキャンドルが並び、全部に火を灯せば電気はいらないだろう……。そのくらいあった。

俺がコマキを驚かせようとしていたのに……。俺が驚いてしまった。叔父さんにしてやられたな……

『わぁ！可愛い！』

洗面所から出て来たコマキ。明るくなった部屋を見て驚いていた。

『蒼太！凄い凄い、凄いサプライズだよぉ！』

あ……これ、俺じゃないんだけど……。まあ、いいか……

『でしょ！コマキの驚いた顔が見たくって！』

『めっちゃ感動したぁ！』

コマキは部屋中を歩き回りながら喜んでいた。

『あ……また涙出てきそうかも……』

俺の方を向き、笑顔で涙を拭うコマキ。バックにツリー……絵になるな……。そんな時……

『何で蒼太……裸なん？』

『えー！』

コマキが背中に…

『これから風呂入りに行こうかなあ……なんて…』

『あ！叔父さん、お風呂自慢してたもんねえ。私も行くう！』

『混浴とか、一緒に入ろっか！』

『……え！』

『嘘だよ。』

『蒼太のばかあ！』

俺は浴衣に着替え……。何故かコマキも浴衣に着替え、まるで新婚夫婦を思わせる様な雰囲気でお風呂へと向かった。

さっき暗闇での出来事は何だったんだ……。この叔父からのプレゼントを開いたら……何もかも飛んでいっちゃうわな……

はあゝ

コマキの喜んだ顔、可愛かったな…

湯気がたちこめる中、思いっきり足を延ばし温泉を満喫していた。

最初は温泉には入るつもりはなかった。澄んだ空気と大自然。そして、綺麗な部屋で見る夜景が俺のプレゼントだった……はずなのに……

露天風呂に入ったら、周り一面雪景色。俺達が旅館に入った後降り始めたらしい。かなりの勢いで積もり始めていた。

本当にお泊まり？

そんな事を思いながら湯船に浸かり、冬の匂いを感じながら時を過ごした。

俺は早々と上がり、叔父のいるロビーのカウンターへと足を運んだ。
叔父さん…いるかな…

カウンターに行くと叔父さんが立っていた。それも、俺の事を見つけて…

『叔父さん、今日はもう帰れないかな？』

『ん〜。タクシーもあるし…叔父さんが駅まで送ろうか？』

『…………。』

俺のワガママで人に迷惑をかける事はしなくなかった。かといってタクシーに乗るお金も……。でも、いきなり泊まりって言つのも普通じゃ考えられなかった。こんな時、隆弘だったら…

大丈夫だよ！雰囲気ですとでもなるって…

とか言っただろうな…

『蒼太、男だろ？時には強引なくらいがいいんだぞ？』

『……。』

まあ…なるようにしかならないか…

そろそろ出る頃だろうと、お風呂出入り口付近にある待合い場所に向かった。

『蒼太、遅いよお。』

椅子に座って待っていたコマキ。濡れた髪をアップにし、色白の頬がほんのり赤く染まり色っぽく見せた。

『……ごめん』

濡れ髪の浴衣って…

俺は思わず生唾を飲んだ。

『そだそだ！めっちゃ雪降ってたねえ！綺麗だったなあ。』

殆ど雪が降らない地で育ったコマキには、白一色という景色が新鮮だった。それだけに感動も倍増した。

『よかったな……あ!』

俺は凄い発見をした。何で今まで気付かなかったのか…

『え!?!なに?』

いきなり大声を出す蒼太に驚くコマキ。

『コマキ、バカだなあ。何で気付かないかなあ。』

俺はニヤつきながら呟く。そして…

『今日、ホワイトクリスマスじゃんか!』

『あ!ホントだあ!』

目をまん丸に見開き、俺の事を見つめるコマキ。そして、優しくニ

コツと微笑んだ。

『蒼太？』

『ん？』

『旅行ってこんな感じが旅行って言うのかなあ。』

口を尖らせながら話し始めたコマキ。旅行未経験のコマキには全てが初めてだった。子供の様に周りを見回し、子供の様に喜ぶコマキに、いつしか護ってあげたい人へと変わっていた。

そんな時…

『あ！』

驚いた声を出すコマキ。ヒョコヒョコと一人歩いて行ってしまった。

『どうした？』

見ていたのは旅館のお土産屋。俺も急いで後をついて行った。

『蒼太！マジナイグッズ！わあ、いっぱいあるねえ。』

『げっ！』

『げってなに？げって！』

『…い、いや』

思わず声に出してしまった。このパターンは…。でも、マジナイグッズが全国展開してるなんて…。コマキが楽しそうに見てる時って、決まって……

『蒼太、これ可愛いね。』

ほら来た…

こんな所で買わなくなつて…。思っただけでも財布は徐々に軽くなり、レシートが増える一方……

ああ…もう帰りたい。

ショップに寄ったあと、旅館内を歩き廻った。館内にはクリスマスソングが静かに流れ、所々にイルミネーションや飾りがぶら下がっている。カラオケボックスや居酒屋。小さなダーツもあり、若いカップルや家族連れで盛り上がっていた。

クリスマス…

何処も混み合っていて、結局行き着く所はゲームセンター……

『蒼太蒼太！ゲーセンだよ？なんかやるお！』

『うん。』

空いてるメダル機に二人で座り、いつもの様にメダルゲームを始めた。それなりに楽しんでた。笑顔や笑い声……。いつもと変わらない。ただ、何か違う。楽しそうに遊ぶコマキを見ながら色々な事が頭をよぎる……。そんな……。ちょっとした違和感を感じていた。

コマキ……。少し無理してないか？

何をするにもそばにいるコマキ。クラスは一緒になった事はないが、共に過ごす時間は長かった。それだけに何故か分かってしまう自分がいた。

『……コマキ?』

『ん?』

『……あっち空いたからあれやろっぜ?』

『うん。』

笑顔のコマキ…

そんなコマキに聞く勇気が俺にはなかった…

メダルの落ちる音、機械音、騒がしい音楽。コマキと遊んでいても雑音が耳から離れなかった…

『蒼太?』

『…んあ?』

『もう!さっきから呼んでんじゃん!どうしたん?面白くないん?』

『いや……』

『……んじゃ部屋に戻る？つまんなそうだし…』

少し不機嫌そうな態度をとるコマキ。でも、怒る気配はなかった。椅子から下り、マジナイグッズを見ながら何故か笑みを浮かべていた。

『行く？』

またしても笑顔…

先に歩くコマキの後を追う様に部屋へと戻った。

部屋に入ると物音しない静かな空間。コマキは部屋に入るとすぐにテレビを付けた。テレビを見ながらやっぱり笑顔…。そんなコマキを見て、俺はすぐにテレビを消した。

『……何で消しちゃうの？』

笑いながら再びテレビを付けようとするコマキ。俺はその手を掴み、コマキの目をジッと見つめた…

『…………蒼太？』

一瞬、俺と目を合わせすぐに目をそらす。さっきまでの笑みは消えていた。

物音一つしない静かな部屋。遠くから微かに聴こえるクリスマスソングが切なくも聴こえる。

クリスマスツリーの青く光る電飾が、俺達をより一層沈黙の世界へと導いた……

凍り付く様な空間。そんな静まり返った沈黙を破ったのはコマキだった…

『…蒼太？』

うつすら笑みを浮かべ、ソツと俺の手に触れた。

『……やっぱり…分かつちゃうよね…。』

え？何…いきなり…

コマキは蒼太と向き合い、目を見つめながら話し始めた…

『今日…全部話そうって思ってた…。でもね？やっぱり…勇気なくて…。怖かった…。もし、蒼太に嫌われたらどうしようって…。そんな思ったら…笑うしかなかったんだあ…。』

俺は黙ってコマキの話に耳を傾けていた。

『私…』

私？

『蒼太の事、諦めようって思ってたんだあ…』

俺の目を見つめながら話すコマキ…。頑張って笑顔をつくっていても、大きな瞳には今にもこぼれ落ちそうな涙が…

『蒼太の好きな人…綾さんなのかなって…。いつも仲良さそうに話してるし…見ないフリしても気になっちゃう。クラス違うから…綾さんには勝てないかも…って。』

コマキから見た蒼太と綾の関係はまるで交際している様に見える。そんな二人を見ていたコマキには、辛く切ない一時でもあった。そして…

『な、何…』

『蒼太と綾さんがキスしてるの…見ちゃったの…』

え！

……あ！あの時か……。誰もいなかったと……。だから、コマキ泣いてた？遙も言ってたよな……確か……

コマキと屋上で喧嘩っぽく別れた時、落ち込んでた蒼太にソツと口付けを交わした綾。偶然見てしまったコマキは現実を目の当たりにし、泣きながらその場を走り去っていた……

その瞬間、コマキの瞳から大量の涙がこぼれ落ちた。

『信じようって頑張ったんだよ？でも、そんな時……三橋君に告白されて……』

『み……あの三橋？』

『でも……蒼太の事……』

途中で喋るのを止め俯くコマキ。そんなコマキの頭を優しく撫で……

『……それは違うよ？』

俺は優しく微笑み、頭をグシャグシャに撫でた……

『綾はただのクラスメートだろ？それにあれはただの事故……そう、事故だから！それに、コマキの事、嫌いだったら一緒にいないだろ

？どれだけの時間、俺の隣で過ごしてたんだよ…。少しは俺の気持ちを知れ！』

蒼太のシャツを握り締め、ピクリともしないコマキ。俯き、声を殺しながら蒼太の答えをジッと待っていた。

『コマキ？』

『……？』

俯いたままピクリとするコマキ。

『俺は…お前の事が………』

そう言つてコマキの顔を強引に俺に向かせた。あまりの行動に驚きの表情を隠せないコマキ。そんなコマキの表情は、我慢出来ず涙でグシャグシャになっていた。

『蒼……』

俺は、コマキが何かを言おうとしている唇にソッとキスをした。そして、強く抱き締め……耳元で静かに囁いた…

『コマキ？一回しか言わねえぞ？』

声を殺しながらも我慢出来ずに流れる涙。そして、蒼太と離れたくない……。コマキの気持ちを抱き締める力の強さを物語っていた。

『…初めて逢った時から…俺は好きだったよ……コマキの事。だから……ずっと一緒にいようね……』

次の瞬間、コマキは思い切り泣いた……。浴衣が鼻水と涙でビショビショになるまで泣き続けた。今まで不安のまま共に過ごしてきた時間、やっと両想いになれた実感を……喜びを全て蒼太にぶつけた……

そんなコマキを強く抱き締め、頭にキスをした。そして、聖夜の最高のプレゼントは……二人に……幸せな時を与えてくれた……

永遠の喜びを……

第7章 1 届け…

『隆弘…最悪!』

『おい!あぶつ……………』

高二の冬…

誰もが心踊るクリスマス。幸せな一時を過ごす二人の裏側には思いもよらぬ出来事がおきていた…

24日の朝…

隆弘はいつもの様に静とデートをしていた。

『今日はクリスマスイブだね♪』

『そうだな。』

『今日は思いっきり楽しむよお!』

嬉しそうにハシャぐ静。満面の笑みを浮かべ、二人腕を組みながら仲良く歩いていた。

行き先は遊園地。

前々からチケットを取ってあり準備は万全。

抜かりのないシツカリ者の静。外見は今風のギャルだが、遊んでそうで実は真面目でデリケート。

それに比べ、変な所はシツカリ！我が強く、人生を少しなめてる性格の持ち主！そして、ちよつとどこか抜けてるチャラ男の隆弘。

喧嘩が絶えない毎日…でも、すぐに仲直り。周りから見た二人は、凸凹に見えて実は羨ましがられる理想のカップルだった。

絶叫マシンに乗り、ホラー館で叫び、色々なアトラクション。一日はあっという間に過ぎていった。

日も暮れ始め…

『隆弘？』

『あ？』

『…あれあれ!』

静が指差したのは…グッズやお土産が売っているショップ。店の中には沢山の人で賑わっていた。クリスマスイブだけあって皆、幸せそうな笑顔…

『隆弘、ちよつと待ってて?』

そう言つて静は一人店の中へ入っていった。

よくまあこんな混雑した所に入っていけるよな…

そんな事を思いながら外で一人待っていた。

10分…15分…

店の中から笑顔で飛び出してきた静。

『ふう〜!』

一息つき、隆弘の元へと歩み寄った。両手にはお土産。

『隆弘…はい!』

『……へ?』

『サンタさんからのプレゼントだよ!』

白い息を吐きながらプレゼントを手渡し、優しく微笑む静。その笑顔はとても可愛く、周りのイルミネーションなんかよりも輝いていた。

『……開けても…いい?』

『え〜?ちょっと恥ずかしいけど……いいよ。』

恥ずかしそうに微笑む静。そんな静に思わず見とれる隆弘…

『…あ、ありがとな?』

急いで封を開け、箱を開いた…

『おお!めっちゃオシャレじゃん!』

中身は、レーザー加工されたクロスのシルバーネックレス。

『隆弘、これ欲しかったでしょ？』

『すげえ！シー、さすが俺の女だよ！ありがと！』

子供の様に喜ぶ隆弘。そんな隆弘を見ながらソツと腕を組んだ…

『隆弘？大好き…』

『…俺もだよ…。あ！シー！』

『ん？』

『これ…付けて？』

静からプレゼントされたネックレスを手渡し、少ししゃがむ隆弘。
隆弘の頭の後ろに手を回し、ネックレスを付ける静…

…そのまま、静を抱き締めた。

そして、耳元で…

『すげえ嬉しい…ありがとな…』

周りの目も気にせず抱き締めあう二人。最高のクリスマスイブでした……

…この後、二人の間にあつてはならない出来事が待ち構えていた……

いつ渡そうかな…

コートのポケットの中に忍ばせたプレゼント。静から先にプレゼントされ、少しタイミングを逃したまま園内を歩き回っていた。

閉店間近つてのもあり、客足は徐々に減り始めていた…

『何か…ちよつと腹減らね？』

『あ！空いたねえ…って食べてないじゃん！』

お互いの驚いた表情を見つめ、そして思わず笑い出す。

我慢……忘れていたつてのが正しいだろう。あまりの楽しさに、空腹すら忘れてしまう。そんな時間はあっという間に過ぎていってしまうものだった。

『何か食いに行くかあ。』

『うん！』

笑顔で頷く静…

そんな嬉しそうな静の顔を見て思わず微笑んでしまう。そしてそのまま遊園地を後にした。

静の手をグイグイ引っ張りながら駅とは違う方向へと歩き出す俺に戸惑いながらも付いてくる静…

『隆弘？駅あっちだよ？』

『……うん』

静は急に立ち止まり駅を指差した！

『あっち！』

静の表情は心なしか少しこわばっていた……気がした。

『え？……どうした？』

『……駅あっちだってえ！』

『知ってるよ？どしたん？』

『……………』

確かに…

先を見れば一目瞭然！このまま行くとネオン輝くホテル街！

俺がラブホにでも連れ込むと想ったのだろう！

『シー………… お前バカチンだなあ！』

『………… だつてえ…………』

顔を真っ赤にしながら俯いてしまった。

静とは付き合って一年以上たつものの、体の関係はまるでなかった。男と違って女はかなりの勇気があると、周りの女友達やクラスメイトから聞いていた。だから…………

『じ………… じゃあ何でこつちなん？』

口を尖らせて怒りだす静は………… それでも可愛いと想ってしまう自分がいた。

『くくくつ………… バイク！』

思わず笑ってしまった。あまりの純粹さと、少ししてやったという満足感が笑いを込み上げさせた。

『笑うなあ！』

『ああ、ごめん。でも、スカートじゃなくてよかったな！』

そう言って徐にポケットからバイクの鍵を取り出した。

『って言うか隆弘…バイク乗ってたんだねえ…』

『んあ？だって遊ぶの大抵駅前じゃん。使わねえっしょ？』

『うん…まあそうだけどお…』

何か煮え切らない静の言葉を聞き流し、自然にヘルメットを手渡した。

『…ありがとう』

『ん！』

バイクに跨りヘルメットを被る。そして、キーボックスに鍵を入れようと……

チャリン！

鍵を落としてしまった。その鍵には家の鍵とバイクの鍵。そして、シルバークロスが付いていた。

慌てて拾う隆弘の行動は静からしてみれば面白くなかった。彼女でありながらバイクの事すら知らない。ヤケに自然なヘルメットの渡し方。そして……シルバークロスの存在……

『ちょっと走ろうぜ？』

『……うん』

そのクロスは……どうしたの？

白のビッグスクーターの後ろ座席に跨る静の心境は複雑だった。自分で買ったかもしれない……。誰かから貰った？これを聞いてしまったら終わってしまう……。そんな気がして怖くなってしまう……

『さあ、行こうか！落ちんなよ？』

『……うん。』

不安…

焦り…

色々な事が頭をよぎる……。楽しかったはずのクリスマスは……。どこに行ってしまったの？

バイクに乗った静は、不安を感じながら目的地も分からぬまま走り始めた…

真冬の夜風を浴びながら夜の街中を走る。深夜つてのもありそんなに車は走っていなかった。

寒いかな…

乗り始めはそう思っていた。けど、隆弘の背中が暖かくて…
ずっとこうしていたい…
このまま、ずっと一緒にいれたらな…

そんな事を思いながら真っ直ぐの道を進んでいた。

『シー？』

『ん？』

『落ちんなよ！シツカリ捕まっとけ！ちょっと飛ばす！』

『……………うん』

初めて乗った後ろ座席。車とは違ってもの凄く速く感じていた。ただ、街のイルミネーションが流れる様に映し出され、素直に綺麗と…。住み慣れた街の意外な一面に感動する瞬間だった。

『隆弘？』

『ん？』

『なんか綺麗だねえ。』

『ふっ！』

『な、何で鼻で笑うの？』

『だ、だってよぉ……。』

『ん！？』

『……ごめん』

信号が赤になるとちよつとした会話を楽しむ。ヘルメットをぶつけてみたり、強く抱き締めてみたり。会話をしている時はとても楽しい…。でも、走りだすと…鍵に付いているアクセサリーに目がいつてしまう…

隆弘の温もりを感じながら、どこか不安と隣り合わせ。こんなに近くにいるのに何でなんだろう…。

不安が不安を呼びドンドンドンドン不安が募っていった……

『曲がるから気い付けてなあ！』

国道から右折し、周りにはなんだか静かな工業地帯へと…

『ふう、着いた』

隆弘はため息を吐きながらヘルメットを脱いだ。髪の毛をぐしゃぐしゃにし、ニコツと微笑む…

『ほれ！シーもメット取れ！行くぞ？』

『…うん』

ゆっくりとバイクから降り、ヘルメットを脱いだ。そして周りを見渡す…。先を見れば街灯すらない暗闇の世界。こんな場所に連れてきて何を…

『隆弘？』

『……黙って付いて来い！』

そう言つて静の手を握りしめた。そして、そのまま歩き始めた。

道路を渡り茂みをくぐる。街灯の光も当たらない所を携帯の光だけで歩く。

『隆弘…何処行くの？ちょ…怖い…』

『……大丈夫！』

隆弘はそう呟き、さらに奥へと突き進んでいく。

ちよつとお…

マジ怖いよお…

こんな所に来て…何が目的なの？

不安な叫びは隆弘には届くはずもなく、思わず目に涙を浮かべる静…

『おしっ！もう少しだ！』

口から白い息を吐きながら、必死に何かに向かって進んでる隆弘がいた。

隆弘……あれ？

茂みの先に見える光……月の光？それとも……

『シ……静？』

『はい！』

え？何いきなり……

いつもシーって……何か緊張しちゃうよお。

『静に見せたかったんだ。俺の一番好きな場所！』

そう言っただけで地面に座り込んだ。

え？ちょっとお……そこどいてよ！

一人茂みから出れずに立ち往生していた静。

『ちょ……隆弘どいて！』

『いてっ！ああ、ごめん。シーいたんだあ！』

『あゝヒドくない？マジありえないから！』

後ろから軽くツツコミを入れ、静もやつとの思いで外へ…

わぁ！なにこれ…

静の前に現れたのは、クリスマス色に飾られた綺麗な街並みだった。必死に歩き、たどり着いた先にこんな景色が…高台から見下ろす街は正に宝石箱の様…。

『ええ？……………』

想わず言葉を無くす。手を口に当て、キラキラ光景色をただ見つめるばかり…

『なぁ？すっげえ感動だろ？』

『うん！』

さっきまでの不安はどこぞえ。気付いたら不安の涙は感動の涙へと変わっていた。

『泣くなよな？』

『…だつてえ』

想わず隆弘の胸に飛び込む静。そつと静を両手で包み込み、優しく抱き締めた。

『この景色…クリスマス限定なんだよ？だから…静に見せたかったんだ。』

『…ありがとう』

涙を拭いながらゆっくりと地面に座り、再び景色を見つめる。

『…あ！』

隆弘はわざとらしく何かに気付いたフリをし懷に手を伸ばした。そんな隆弘の行動を見つめる静は……ちよつと嬉しそうにも見えた。

『…………ほれ!』

徐に取り出した小さな箱。静に手渡し優しく微笑んだ。

『なにこれえ…開けても…………いい?』

『ああ…………って、もう開け始めてるし!』

丁寧にリボンを外し、セロテープをはがした。そして、ゆっくりと箱のフタをひらくと…

『たいしたもんじゃないけど…』

『わあ!可愛いこれ。』

中には2つの星が絡まったシルバーのアクセサリが2つ入っていた。

『一個は俺のだぞ?シーとお揃なんよ!』

『嬉しい!』

隆弘……ありがとうね…

『隆弘？』

『ん？』

隆弘が振り向くと同時に唇にキスをした。街の明かりがスポットライトの様に二人を照らし、より一層二人を輝かせた。

不安で不安でいてもたってもいられなかった…

結局、ただの思い過ごしだったんだなあ…

信じていればきっと良いことあるんだなあ…

ありがとうね…隆弘…

大好きだよ……

ブ
ォ
ン
ボ
ボ
…
…
…

『隆弘？』

『あ？』

『お腹空いた！えへへっ』

『そだな！何か食いに行こっか！』

二人は少しの間、夢の様な時を過ごし、寒さと空腹には勝てず渋々茂みの世界へと足を運んだ。

ゆっくりと暗闇を潜り抜け徐々に出口へと…

ん？

隆弘はすぐに足を止めた。出口付近に近づくにつれ、なんだか騒がしい。そして、隆弘のバイクの周りに群がる人影と三台のバイク…

……ポポポ

……ブォン

『シー、ここで待ってて!』

『ええ?嫌だよ!』

『大丈夫だよ!ちょっと様子見てくるだけだから!』

『……うん…早くね!』

茂みの中で小声で話す二人は怪しかった……

そんな事を思いながら静を残し外に出る隆弘。静も心配だけど……
バイクも……

優先順位を間違えている……隆弘。とその時だった!

『あ!やっぱり隆弘じゃん!』

と言って一人の女性が隆弘に近付いて来る……

『あじゃねえだろ！人のバイク囲んで何してんだよ！』

隆弘は血相を変えて怒鳴りつけた。

え…知り合い？

静は暗闇の恐怖と闘いながら隆弘の事を見守っていた。

見知らぬ金髪の女性が二人。そして、三人の男がバイクを囲んでる。そんな光景を相手に見つからない様に覗き見していた…

『それに何なんだよコイツらは！おい、触んたって言ってるだろ！』

『な、何怒ってるの？相変わらずだねえ隆弘は。』

見知らぬ男達に自分のバイクを触られているのに機嫌が良い訳がない！隆弘は苛立ちを面にだして男達に近付いていった。

『おい！触んなよ！』

一人の男の腕を掴み、睨みつけた。今にも喧嘩になりそうな雰囲気。正に陰悪なムードだった！

『あ？何コイツ！沙耶^{サヤ}やつちゃっていいん？』

余裕な表情を浮かべ顔を近づける男。そんな二人の間に割って入ったのは沙耶だった。

『ちょ、ちょっと喧嘩しないでよ！それに、マサ君じゃ勝てないよ？隆弘強いから。』

沙耶って誰？何で隆弘の事……知ってるの？

徐々に知り合いだと分かってきた静。手に汗握る思いだった…

『沙耶テメーふざけてんじゃねえぞ！』

『まあまあ、相変わらず短気だねえ。ホント昔と変わらないね。』

頭にきている隆弘を目の前にしても笑みを浮かべる沙耶。そんな二人を静はジッと見つめていた。

『沙耶、ちょっと下がってけよ！』

他の二人も割って入ってきて三対一…

『マジ止めた方がいいと思うよぉ？ちよつと前まで八方美人の頭だったんだから。』

『え！』

男達の驚きの声は凄く綺麗にハモった。そして、さつきとは別人の様に小さくなってしまった。

『何なんだコイツ等！俺のバイクに傷でも付いてたらマジ成仏だぞ！』

『す…すんません』

茂みに隠れている静……心境はさらに複雑に…

暴走族？静の知らない隆弘、まただ……また……発見……しちやつた……

『早く帰れ！子供は寝る時間だ！』

隆弘は虫を払うかの様に手を振り、沙耶達を煙たがった。

『子供って一つしか変わらないじゃあん！ホント成長ないねえ！』

隆弘のそんな仕草に少しムカついたのか間髪入れずに突っ込みを入れる沙耶はなれたもんだった。

『うるせーな！帰れよ！』

『やだあ！せつかく会えたのに……』

『はいはい！』

中学の時、強い奴らを集め出来たやんちゃグループ八方美人！最近と言っても高校入ってすぐに二代目に継がせ隆弘は引退していた。現役の時はある色んな伝説を残し、名前を出せば大抵の悪は身を引いた。そんなちよつとした時代もあつたんだ。その時、隆弘に憧れて入った奴らは数知れず。その中の一人が沙耶だった……。そして、今も昔もワガママっぷりは変わらなかった……。そして、そんな二人の繋がりをまざまざと見せつけられた静……。またしても不安の種が……

『早く行けや！うぜえんだよ！』

『いゝやゝだ！』

隆弘の腕にしがみつき、離れようとしないう沙耶。

こんな関係を長々と静には見せたくはなかった。

とりあえずこの場を離れるか！その場にいろよ…静！

隆弘は強引に沙耶の手を払い、バイクに跨がった。鍵に手を添え、静の方を見る。すかさず目で合図し、一気にエンジンを掛けた。そして、アクセルをおもいきり吹かした！

ブオン！

『ちょ…どこいくの？隆弘！』

あまりの強引さに驚きを隠せない沙耶。

そして、茂みでジッと見つめていた静。

隆弘？どこいくの？おいて行かないで？ええ！？

静は置いて行かれると思い、急いで飛び出した。……沙耶達の前に！

ブオンボボッ！

隆弘？何で行っちゃうの？

静が飛び出した時にはすでに走り出していた！隆弘の背中を目で追
い、自然と後ろを振り向いた。そこには腕を組んでジッと見つめる
沙耶がいた。

『アンタ誰なん？』

『え？』

沙耶の機嫌の悪さがハッキリと分かる顔付き！静は蛇に睨まれた力
エルの様に固まってしまった。

静に歩み寄る沙耶。徐々に影に包まれていく沙耶の顔は悪魔の様に

も見えた。

『アンタ誰なん？アンタのせいで隆弘行っちゃったじゃん！』

『……誰って……』

怖くて怖くて…

あまりの恐怖に足がすくむ。そして、しゃがみ込んでしまった。

隆弘…助けて…

沙耶ともう一人の女が歩み寄る。そして、後ろの方で男達が笑っていた。

…怖いよ

その時！

『おい！』

いきなりの激痛が静を襲った！

沙耶が力いっぱい静の髪を引っ張っていた。

『痛い痛い！私は何もしてないでしょ？』

『うるせえ！何かム力つかねえ？コイツ！』

『痛い！』

『痛いじゃねえし！お前は隆弘のなに？』

隆弘…隆弘…隆弘…

痛みを必死にこらえ、隆弘の助けを待つ静。蹴られ、叩かれ、泣きながらも隆弘を信じ続けた…

痛い…痛い………

意識が徐々に遠のいていく…。そして、そのまま横に倒れ込んでし

まった。

チャリン…

『あ！何これ！』

静が倒れたと同時に落としてしまった物。それは…

『可愛いじゃんこのシルバーアクセ！』

隆弘からもらった大事なプレゼントだった。

だ…ダメ……それだけは…

意識が朦朧とするなか、沙耶の服をつかみ取り返そうと抵抗する静。

お願い…返して…

『そんなに大事か？こんなの捨ててやるよ！』

と茂みの中へ投げ捨ててしまった！

飛んでいく大切な宝物をただ目で追っただけ…。やがて闇の中へと消えていった。

『あ…ああ！』

『ざまみろバカ！』

『何で！？何でそんな事すんの？』

泣きながら怒りをあらわにする静！沙耶を睨みつけ、叩かれても蹴られても…抵抗し続けた…

『離せよ！』

抵抗する静を強引に突き飛ばす沙耶。

その時だった…

『お前等……何してんだよ!』

皆が一斉に振り向いた先には、怒りに満ち溢れた隆弘が立っていた!

何で静が倒れてる？

いったい何してんだ？

目の前に広がるこの光景。隆弘には理解出来なかった！

『おい沙耶？……何した？』

『え！？』

あまりにも冷静な隆弘に思わず裏返った声を出す沙耶。そして、ストンと尻餅をつき、怯えきった表情で隆弘の顔をジッと見つめていた。

『静に…何した？』

さっきまで笑っていた男達まで目をそらす。逃げ出したくても逃げ出せない…体が恐怖に反応してしまったのだ。そして、次の瞬間…

『何してんだテメー等！』

地面に座り込んでいた沙耶の首をつかみ、男達を睨みつけた！

『おい！何したかわかってんだろうな。お前等全員成仏出来ねえぞ！』

拳を強く握り締め、鬼の形相へと変わった隆弘。そんな隆弘を前にして、誰一人沙耶を助けようなんて思う奴はいなかった。

小刻みに震える沙耶。目にいっぱい涙を浮かべ……

殺される…

めっちゃキレてる…

昔の隆弘だ…

怖い…

誰か…助けて…

苦しいよ…

昔は楽しかったなあ…

よくバイク乗せてくれたよね…

何で何で？

勝手じゃん！

ずっと好きだったんだよ…

色々な思いが走馬灯の様に脳裏をよぎった。

目をつむり、頬をつたう涙が沙耶の本音を表す最後の表現となった

……

ごめんね…

『…隆弘？』

弱く今にも消えてしまいそうな声。その声は静だった。

『もついいから……私は大丈夫だから……ね？』

『……静。』

『だから…手……離してあげて?』

地面にちょこんと座る静は、今にも壊れてしまいそうな人形の様だった。

『良いわけねえだろが!』

『いいの!もう…いいから…』

『……静。』

手足に沢山のすり傷をつくり、涙でぐしゃぐしゃになった顔。どれだけめちゃくちゃにされたのかは隆弘には分かっていた。昔、同じ事をしていたから…

それだけに…

憎しみと悔しさでなかなか離す事が出来なかった。

『隆弘…帰ろ?』

『……。』

静はゆっくりと立ち上がり、フラフラと歩き始めた。

静の後ろ姿を見て思う。

ごめん……俺の身勝手な行動がこんな結果を招いたんだ！俺のせいだ……。ごめん……ごめん静。

『……………もう二度と俺達の前に面だすなよ？静に何かあったら………必ず殺す！』

そう言っつて沙耶の首をゆっくりと離れた。

『た……隆弘……』

腰が抜け、立ち上がる事すら出来ない沙耶。

『あ………沙耶？お前に返すわ！これ。』

ポケットから徐に取り出したのはバイクの鍵。ゆっくりとはずしたのはシルバーのクロスだった。そのクロスを沙耶に手渡し、何も言わず静を追う様に走り去った。

『……………あ……ああ……』

今もずっと思っていた人に最後の別れを告げられた沙耶。仲間の前で
おもいきり泣き崩れた。そして…茂みの中へと……

中学の頃付き合っていた二人。些細な出来事から離れ離れになって
再び再会。だが、再会した時にはもう……

俺には……静しくない……

さよなら……沙耶……

フラフラと前を歩く静。そんな静に何を話しかけたら良いのか……

灯り一つない道をゆつくりと歩く。バイクが置いてある場所まではさほど遠くはなかった……はず……

さっきまでの幸せな時間……

そして…

今、二人の間には重く辛い時が……比べようのない程ゆつくりと流れていた……

辛い…

その時だった！

前を歩いていた静が急にしゃがみ込んでしまった！

『おい!』

急いで静に駆け寄り肩を抱いた。

『……なんか……疲れちゃったね……』

静はそう呟き、微笑みながらゆっくりと目を閉じた。

そして意識を失った……

静?……熱い?

……なんかおかしい

慌てて抱え込んだ肩。自然とその温もりを感じ静の顔を見つめる。
そして、体に触れている手のひらから異様な感触が伝わってきた!

汗?……いや……

え!!

『おい! 静!』

温もり…

その温もりは人の体温から感じるものではなく、静の頭から流れる血の温かさからだった!

後頭部から背中にかけて大量の出血!

この量……ヤバイ! もしかしてあの時……

静を強く抱き締めながらポケットから携帯を取り出した! そして…

プルプル…

早くかれ!

早く！
早く！
早く！

『クソ！早くしろ！』

片手で抱き締めながら次のコールで出る。そう願ひ、ただひたすらに鳴らし続けた！

早く早く…
静、ごめんな…
早く出してくれ！

手に汗握りしめ携帯を強く握り締めていた！

早く早くしろ！は……プツ

…もしもこちら…

『は……頼む！早く来てくれ！静が、静がやべえんだよ！お願いだ

から……………」

今も少しずつ流れる時間。さっきまでゆっくりと流れていた時間は
急激に加速していた！

そう、静のタイムリミットは誰よりも早く進み始めていたのだ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9231c/>

願いが叶うオマジナイ

2010年11月9日05時40分発行